慶長以来 新刀辨疑

四

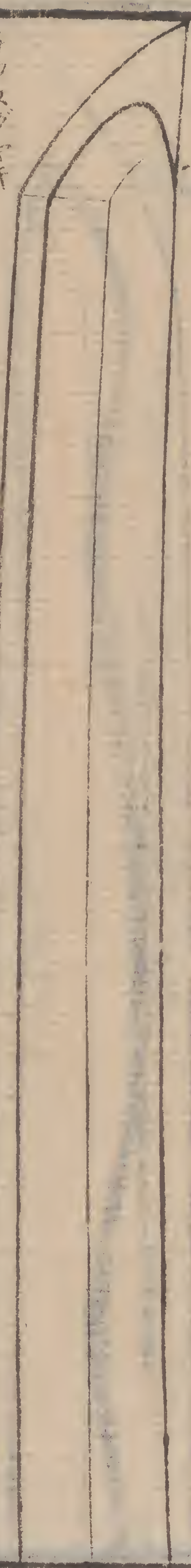
680
.K2

新刀辨疑巻之四

刃略鑑

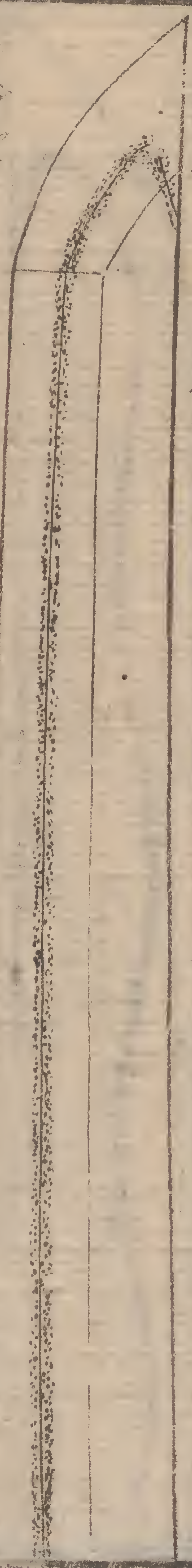
細縵理（ホソスグヤキ）

三原ノ末小笠原昌齊等此刃多シ



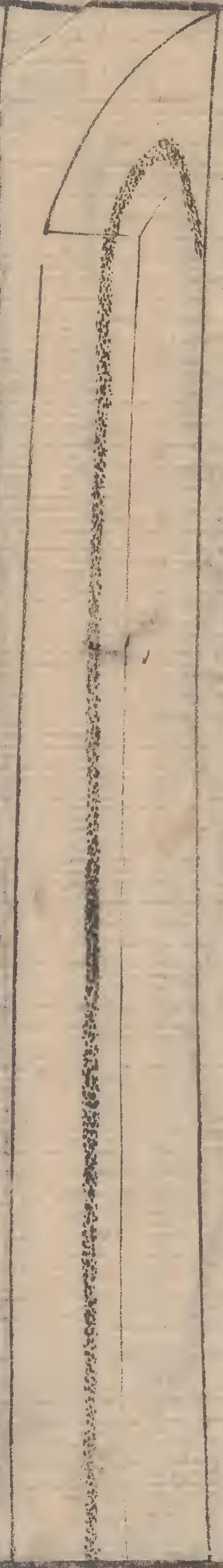
中縵理（チウスグヤキ）

肥前高田南紀重國等ニ多シ



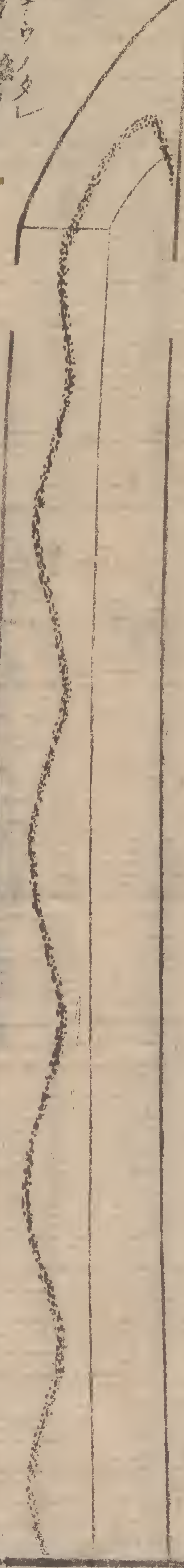
廣縵理（ヒロスグヤキ）

乕徹真改助廣其外諸國ニ多シ

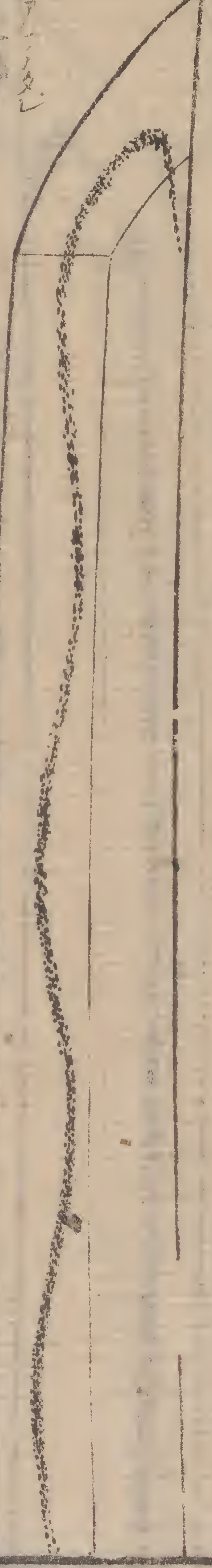


Freer Gallery of Art
Washington D.C.
7638

小湾（コノタレ）

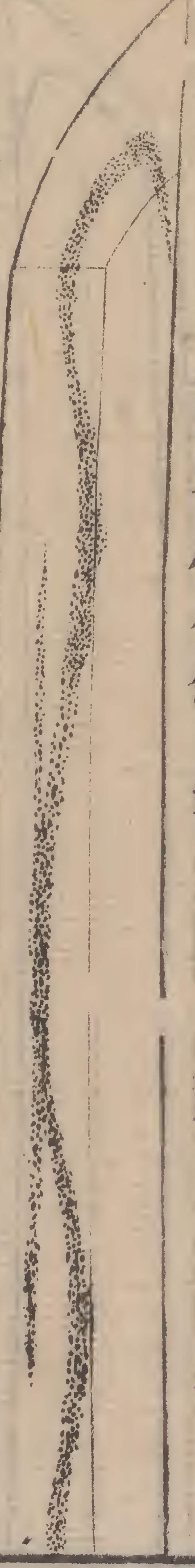


中湾（チウノタレ）



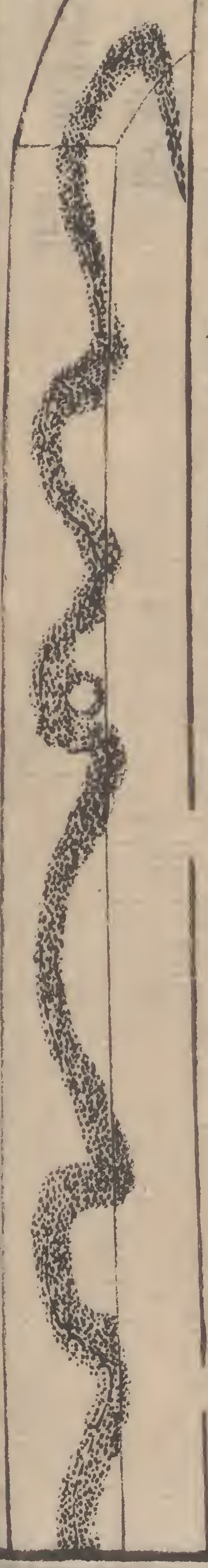
大湾（オホノタレ）

真改助廣帍徹ニ有



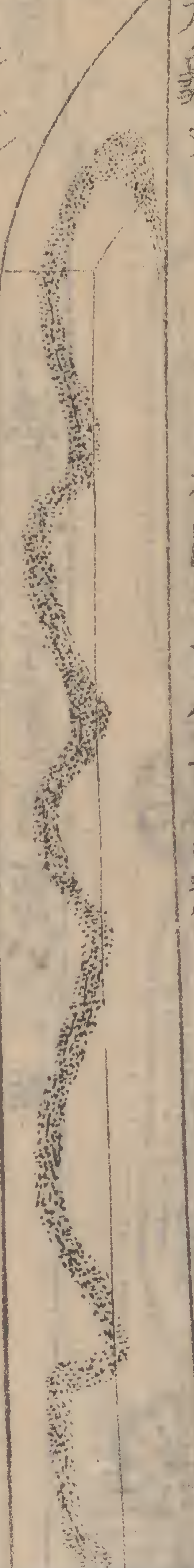
濤瀾亀文（ドウランミダレ）

助廣助直照包等ニ有



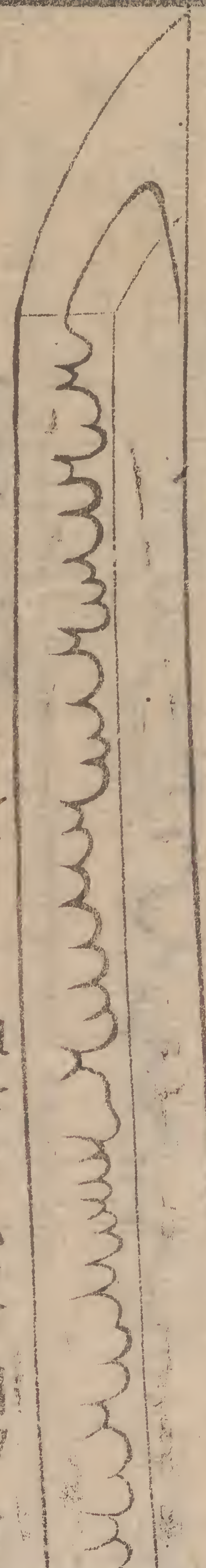
大亀文（オホミダレ）

包貞祐國宗重信吉國輝ニ有



丁子亀文（チウジミダレ）

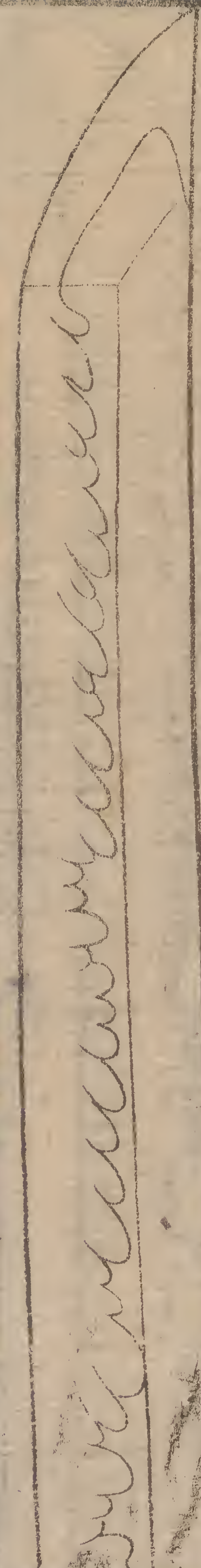
大和守吉道河内守國助ニ有



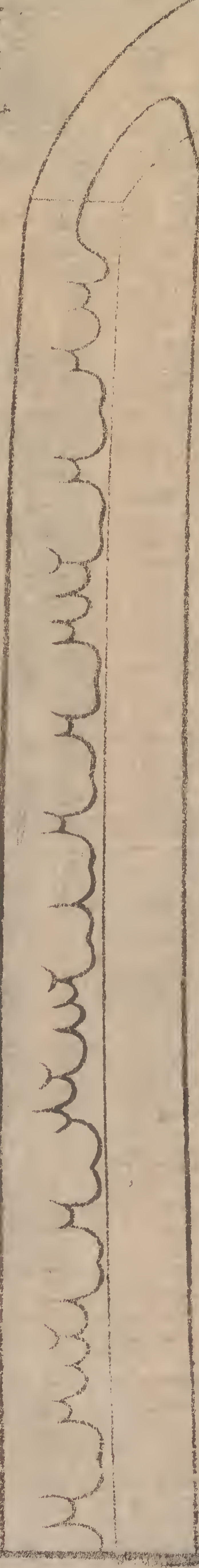
逆亀文（サカミダレ）

河内守國助石堂ニ有

右ノ鋸本富士見西行ハ國助ニ有

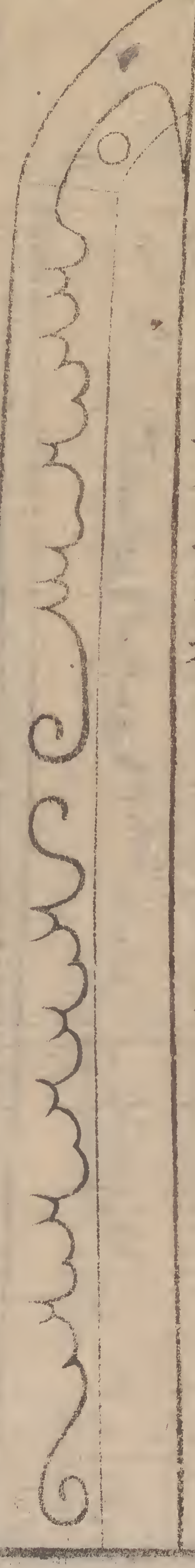


重花刃



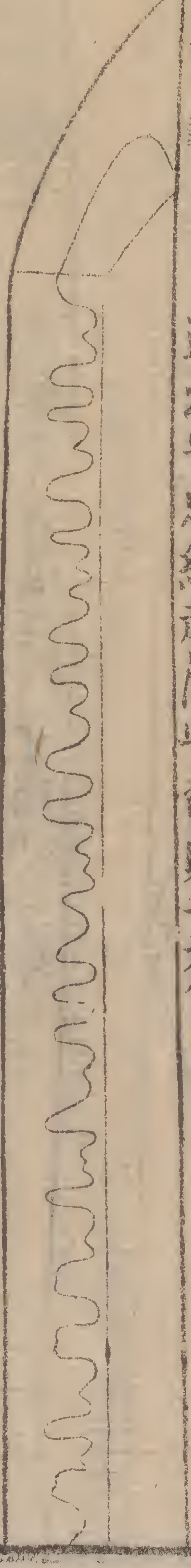
大和守吉道河内守國助ニ有

重花刃



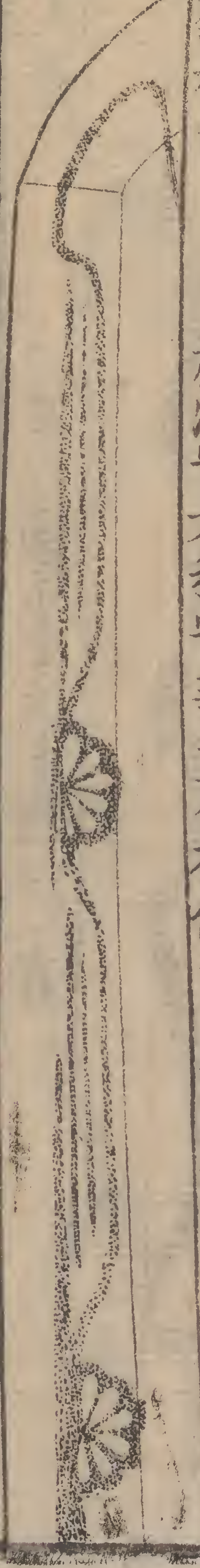
吉道ガ上出来

丁子亂文



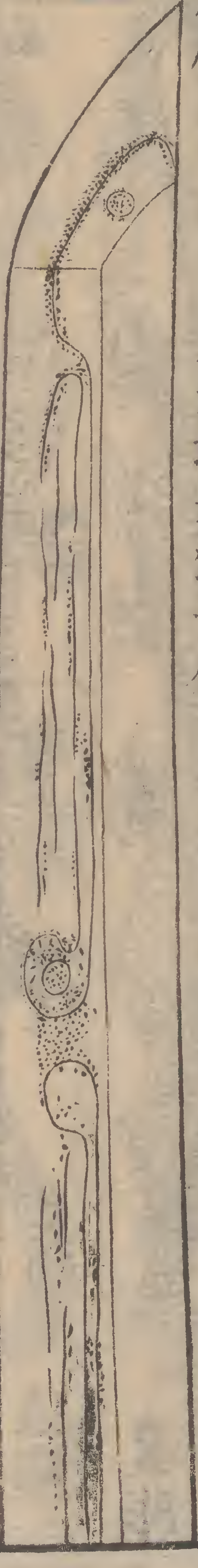
近江守忠綱越後守包貞ニ有

菊水刃



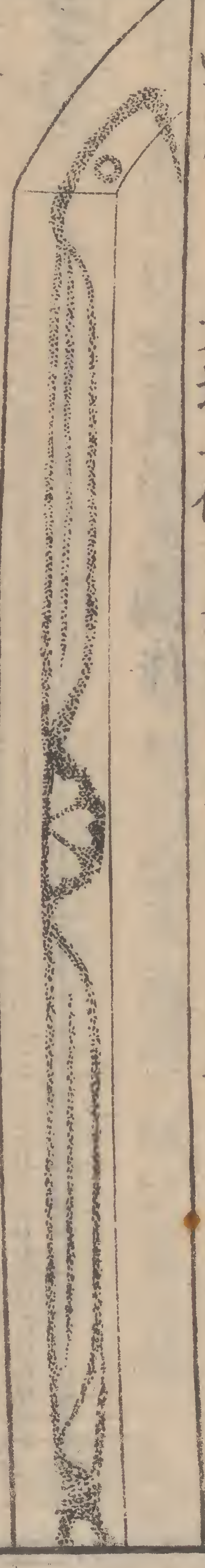
丹波守大和守等ニ有初代ニハ無

簾刃



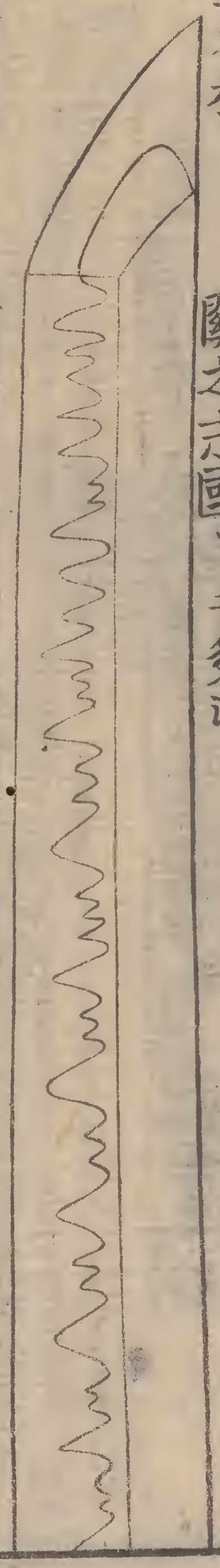
京大坂丹波守代々門人ニモ有

芳野川



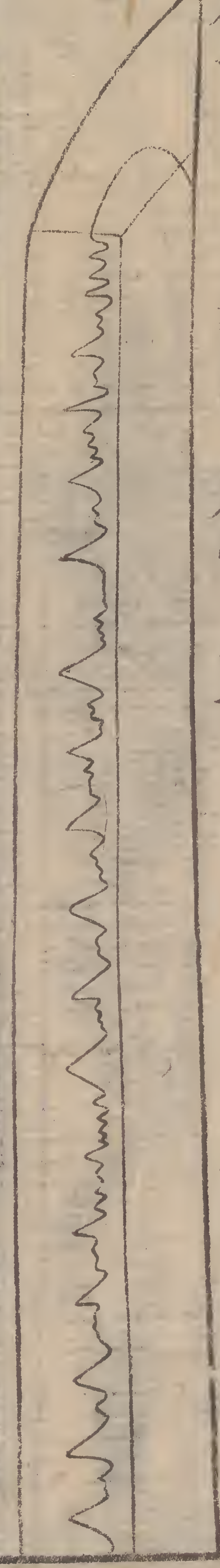
大坂二代之丹波守大和守吉道此刃ニ妙也

三本杉



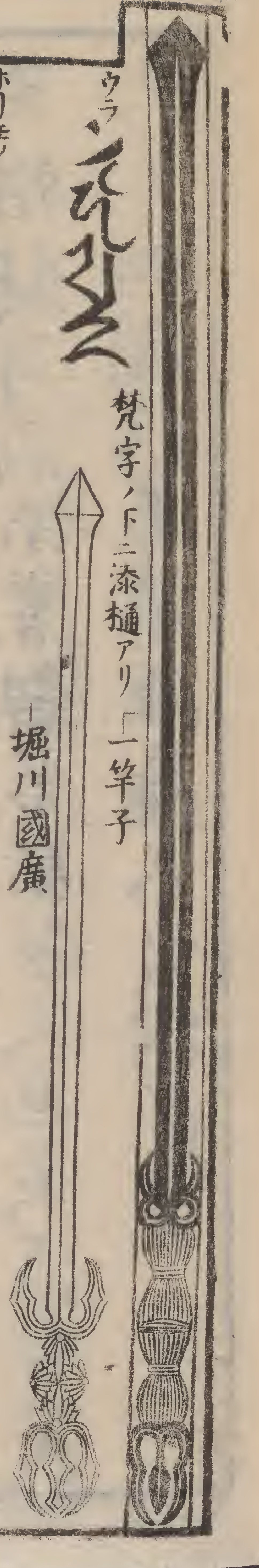
關之末國〻ニ多シ

鬼牙刃



諸國ノ石堂ニ多シ

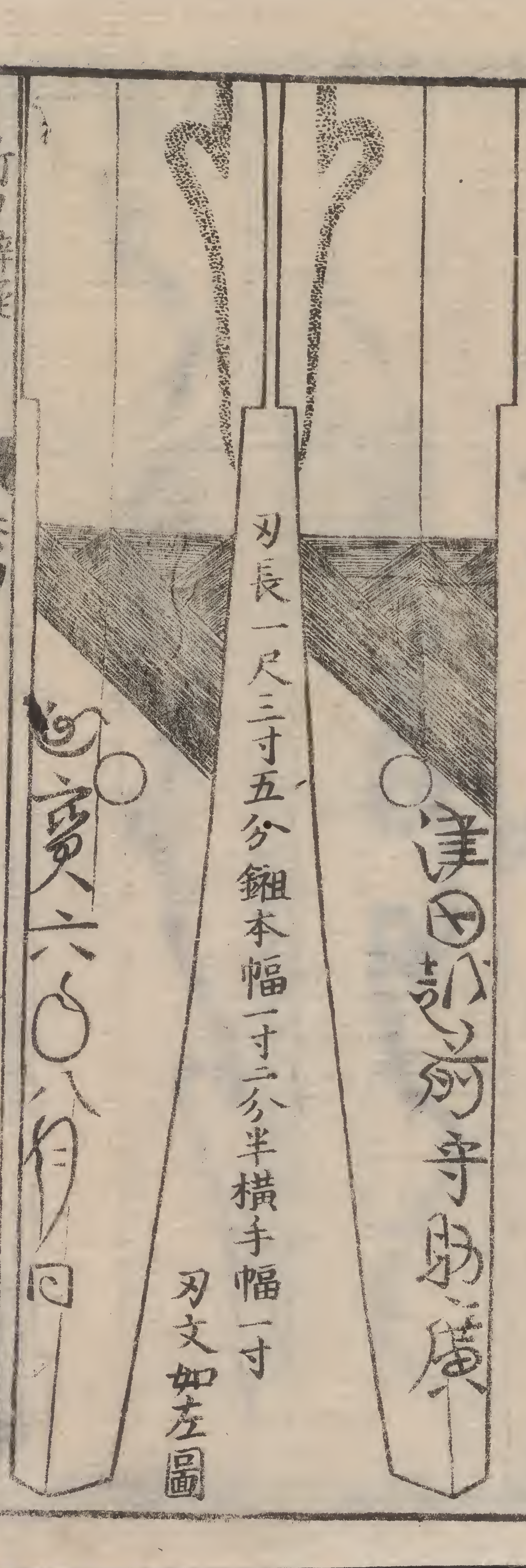
右二刀表裏彫忠綱作

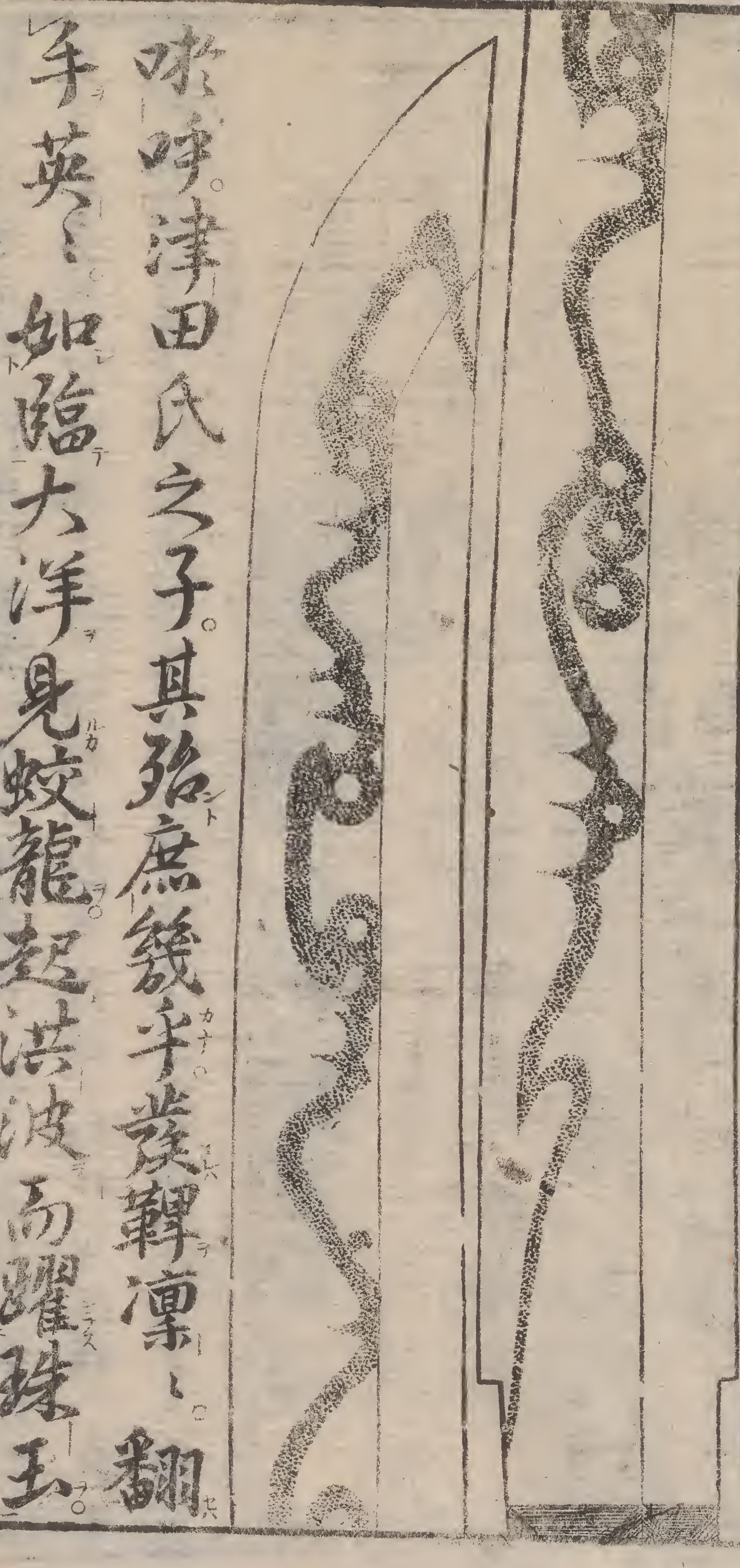


彫刻ハ埋忠明壽一門。堀川國廣一族。大坂眞改一竿子助直肥前忠吉宗長吉長忠長。江戸康繼下原一類越前數輩諸國下坂。筑紫信國一家。末相州綱廣等也。其中明壽國廣眞改一竿子忠吉宗長等ヲ以勝タリト為ベシ

刃長一尺三寸五分鎺本幅一寸二分半横手幅一寸

刃文如左圖

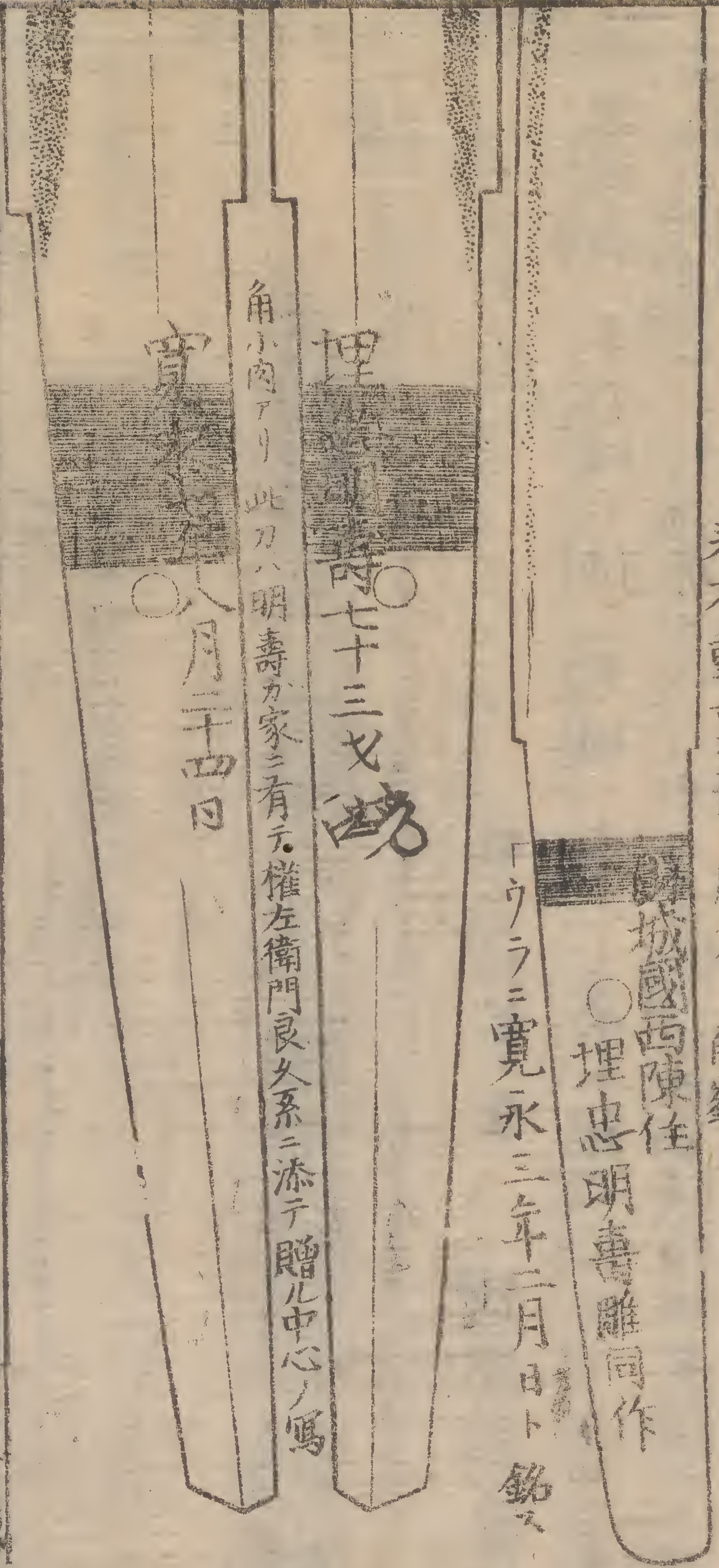


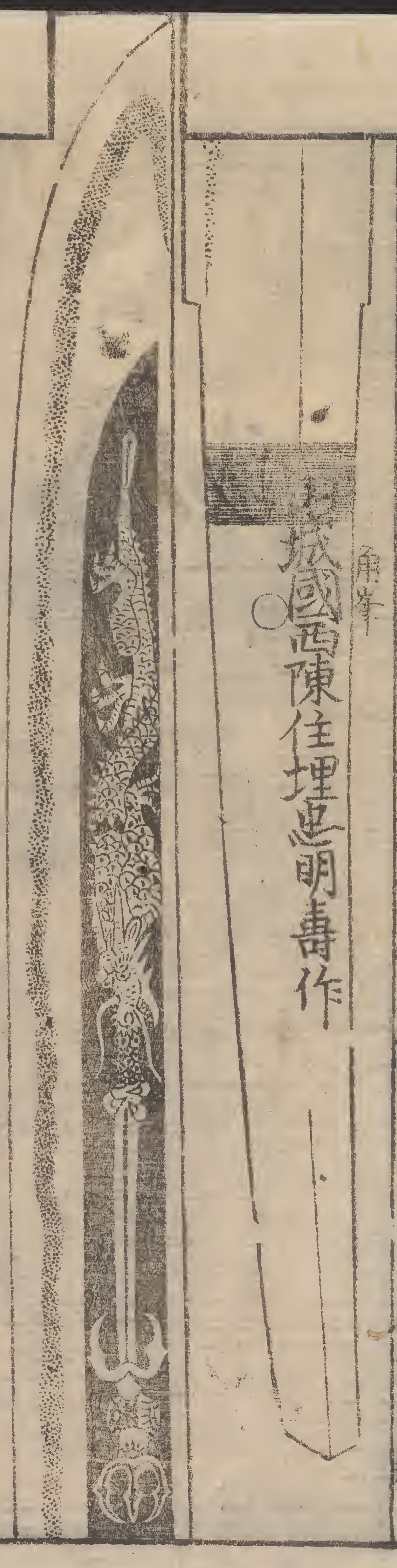


咻咻。津田氏之子。其殆庶幾乎。叢鞾凜〻。翻手英〻。如臨大洋見蛟龍起洪波而躍珠玉。至鞾疑再成未嘗觀若斯刃文也矣。遂賛美之号旭瀾以為濤瀾龜甲文之摸範云。

中心軌範　五畿七道ヲ以分ツ

畿内

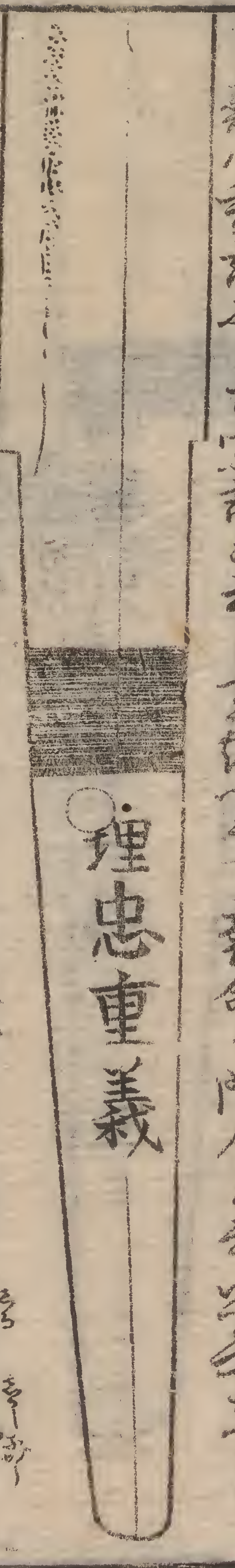




彫アル短劔ノ銘　埋忠明壽

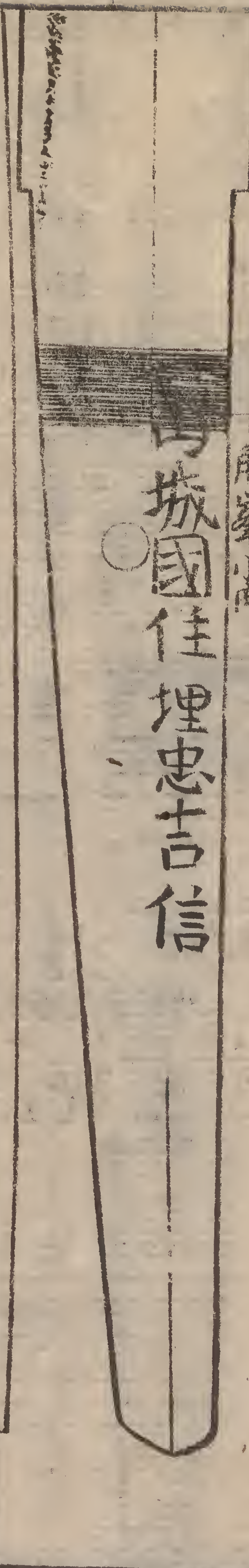
埋忠明壽ハ平安城の住人先祖ハ遠く三条小鍛冶宗近が苗裔より居住の地傳来の鍔師なりといへども刀劔鍛冶より作地金鍔に小鍔をひ流く物頭奉業にて造りて細直刃ハ先祖宗近に似たる物有帽子出来しも違りしず粟田口物に似て銘を鎭まで古風也山城國西陣住埋忠明壽と長銘の方出来物多し其彫物の名人也出来の上の品ハ草の倶利伽羅縛の龍不動觀音生身像等語に及ひ難し又三池の如き廣き樋の中に平象眼に牟礼高松宇治川の先陣等の模様を入れ或鍔目貫小刀柄等まで至るまで高彫或ハ色彫象眼に目を驚かす物多し刀劔の品國廣同位の物也喜十郎と云

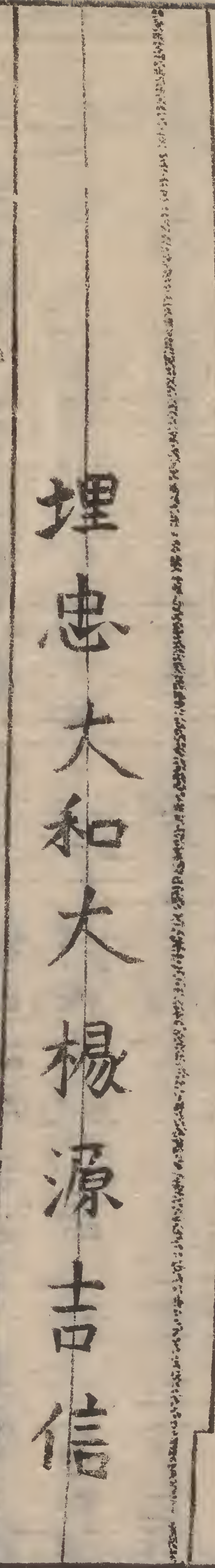
一書に明壽ハ濃州清水に住し壽命宗吉が門人也故に明壽宗吉と云とも云一説に明壽ハ宗近が嫡流也肥前忠吉が系圖に紀すると云も宗近の末流と云り然れば共に同系なる故に本家を恭ひ謂に明壽ハ其の名人故忠吉も門人となりし者なるべし明壽ハ重吉にして宗吉と云し事ハ誤なり壽命が門人と云説も未だ否し



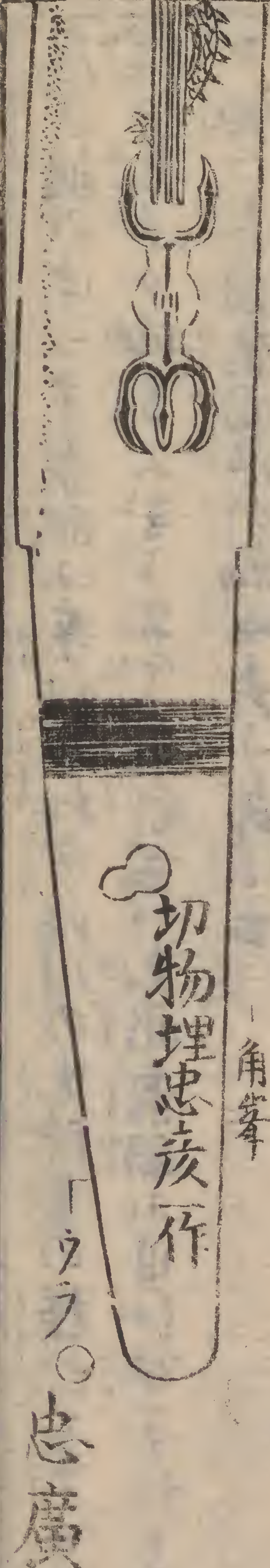
重義ハ明壽が子法橋明真也長治郎と云系譜に家傳三郎す保刀劔の銘ハ重家と切埋忠重義と四字銘多し都て父明壽が作の如し彫

物ニ出ルニ然りといへる上手也はし作世ニ稀也中直刃ニほつれ有て砂多し
是ハ山美平が師なるべし

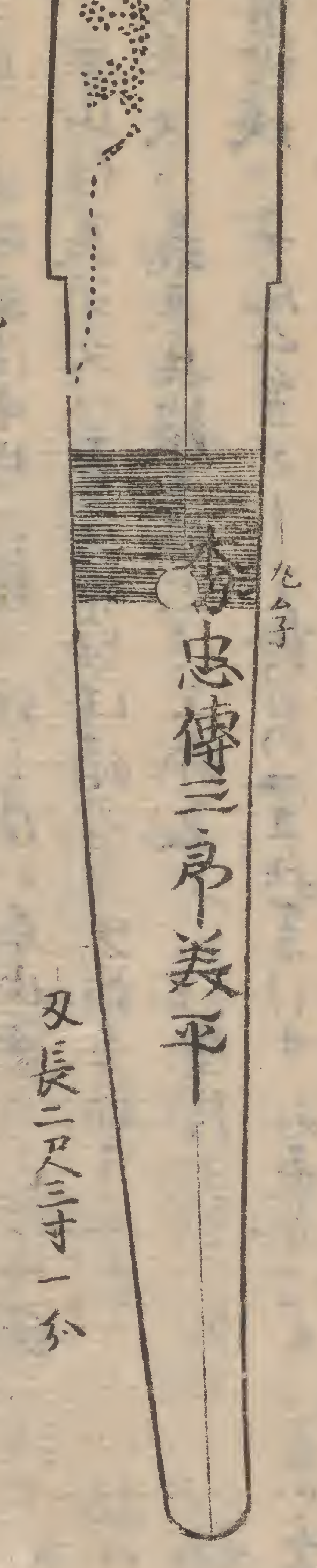


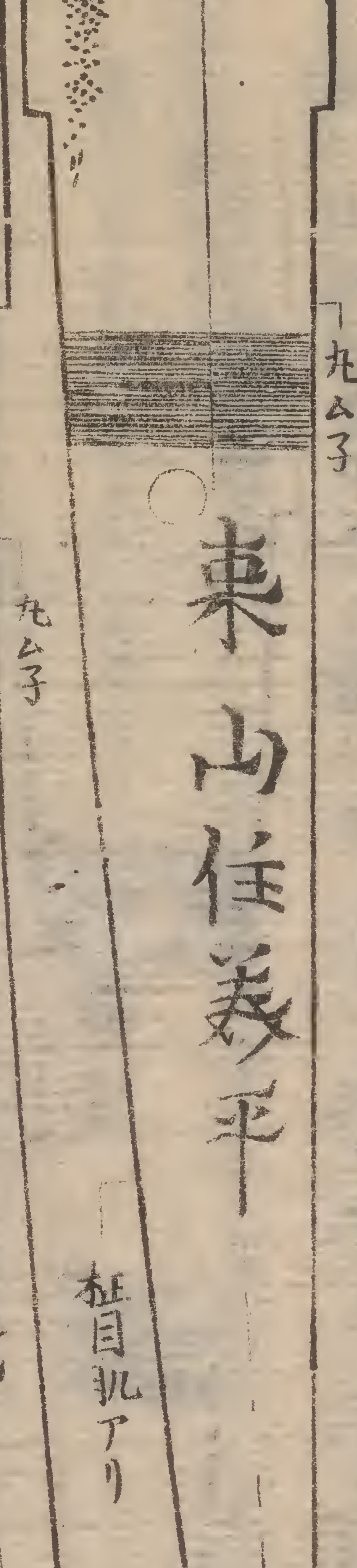


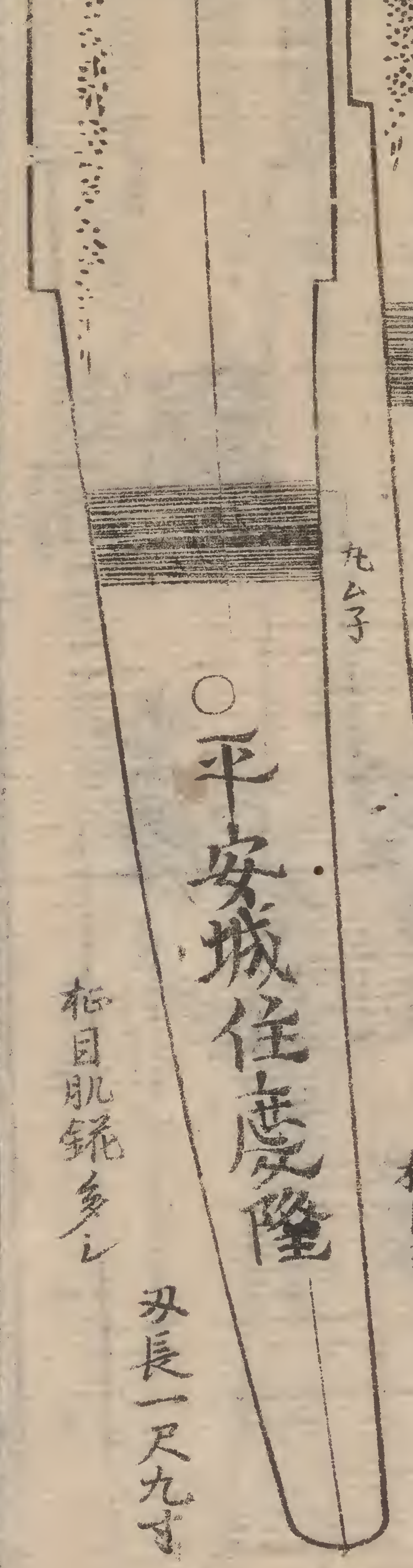
吉信ハ大和守と銘するも有明寿が門弟なる歟明真も亦新切し歟
元禄の比大和守と云吉信ハ二代めの来歴明らかならず上手也

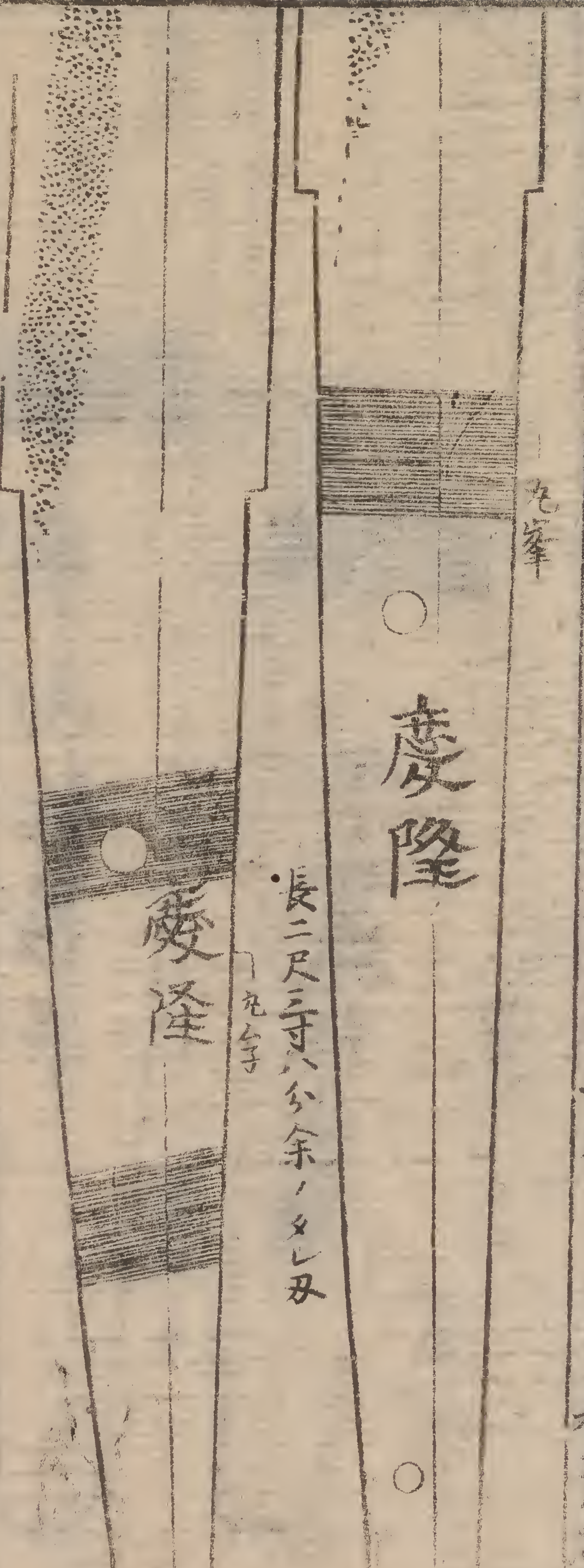


埋忠彦一ハ明寿が一類なるべし吉信彦一とも云しも知れず又
彦右衛門と云者一人有明寿が一族にて一ツ立て彫物をよくす上手也

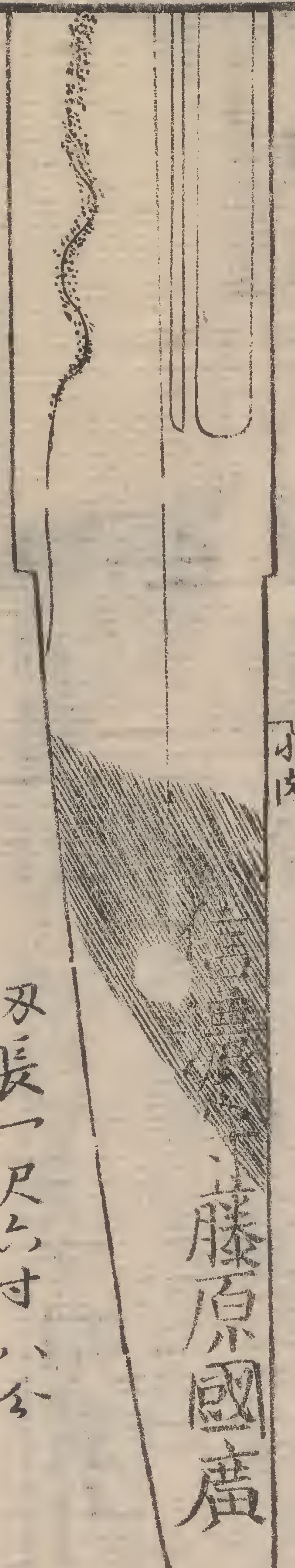




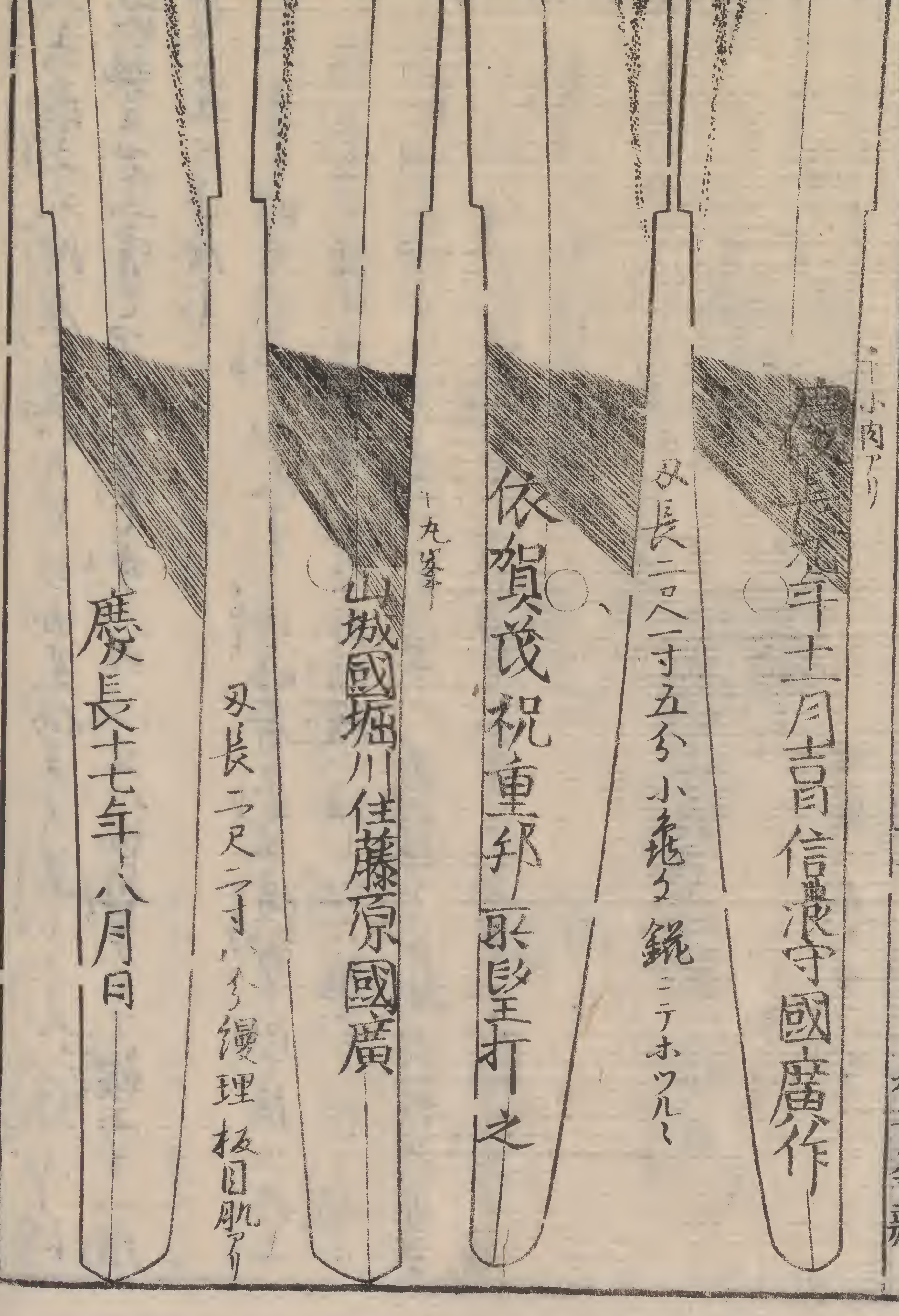




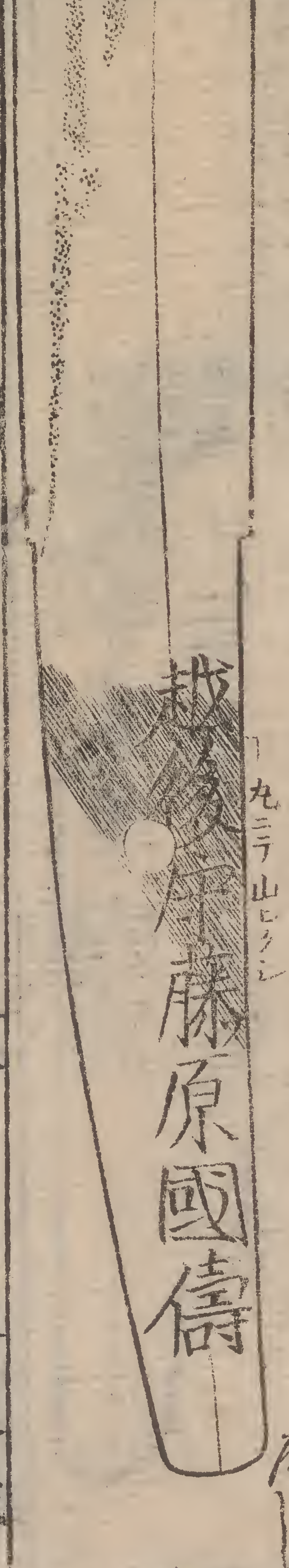
慶隆ハ山城國洛中塔の檀ニ住し後ハ東山黄谷の井の邊ニ住す故
ニ東山住義平又ハ慶隆共切る作の手先板目都共ニ多し凡初ハ
吉平又ハ義平共銘す橋本傳三郎義平大江慶隆と切るも外ニなしの銘
有地鉄ハざんぐりとして板目の肌立荒けず刃氣濁深く陽氣の上る
ニ如し又板目細かにして錬鍛りたるも有何れも刃の上まて美しく
錵多く光至て爽しく白ひるを深し初ハ関亀文の如き亀文多く後
ハ大龜文大濤直刃いろ〳〵の出来何れも華しく一称なくべ
地鉄又見ニ有て見分易し中心の仕立ハ切鑢子まて鑢ニも一流
有上工と云へし
一書ニ堀出羽壽ハ一人まて即時壽ハ宅ニ寄食す仍て橋本傳三
郎美平と銘す後別居して京師塔檀ニ住し私に越前大掾と唱ふ
堀忠親壽は事なきまて殘つす平安東山ニ居を移すと云橋本は親與ハ非ず
らん時壽ハ寛永の始ニ七十有余歳美平ハ元禄寛永正徳の比迄是時
壽ハ子孫慶隆法橋明寿ハ一人なるらん

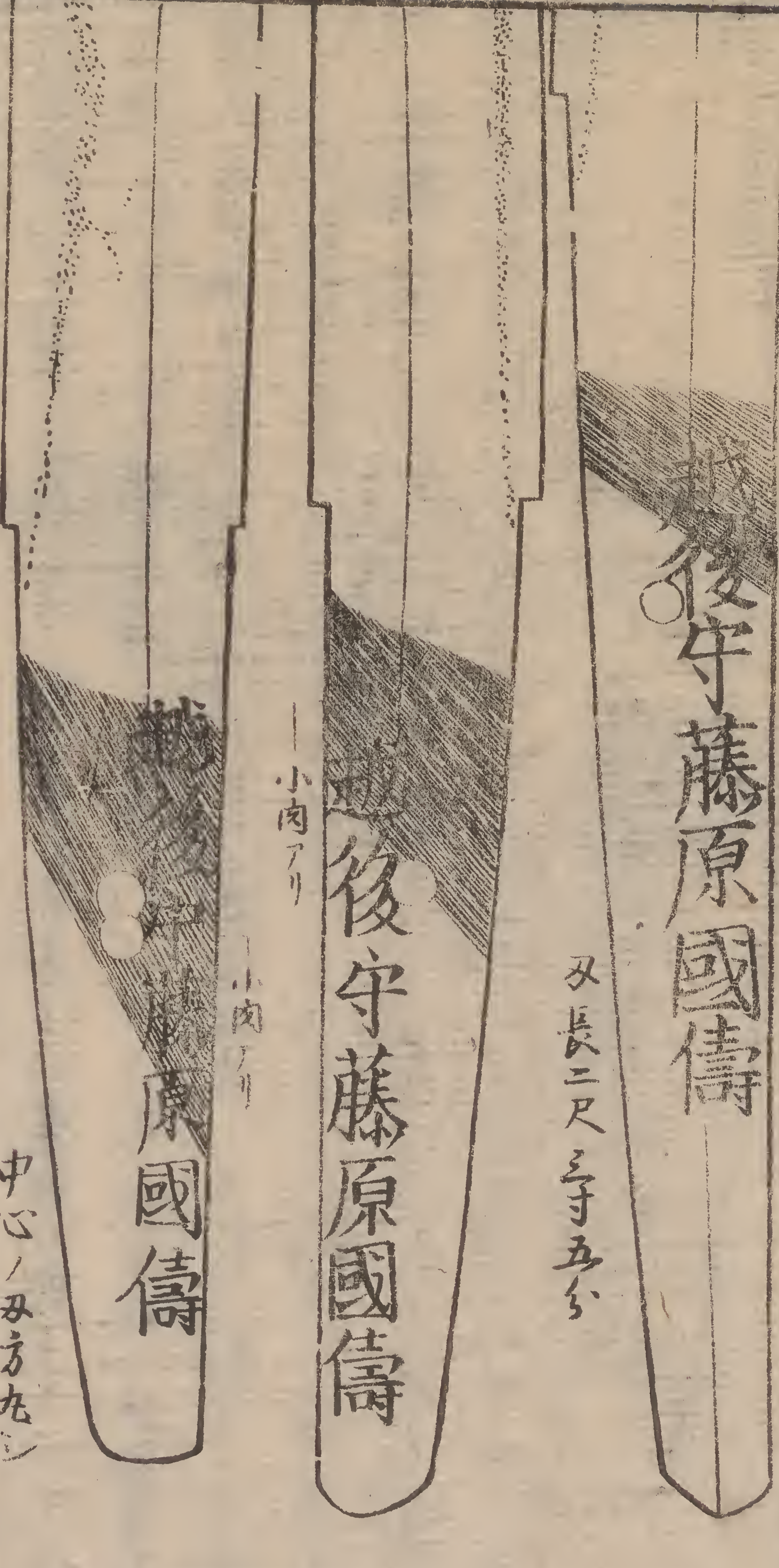


刃長一尺六寸八分



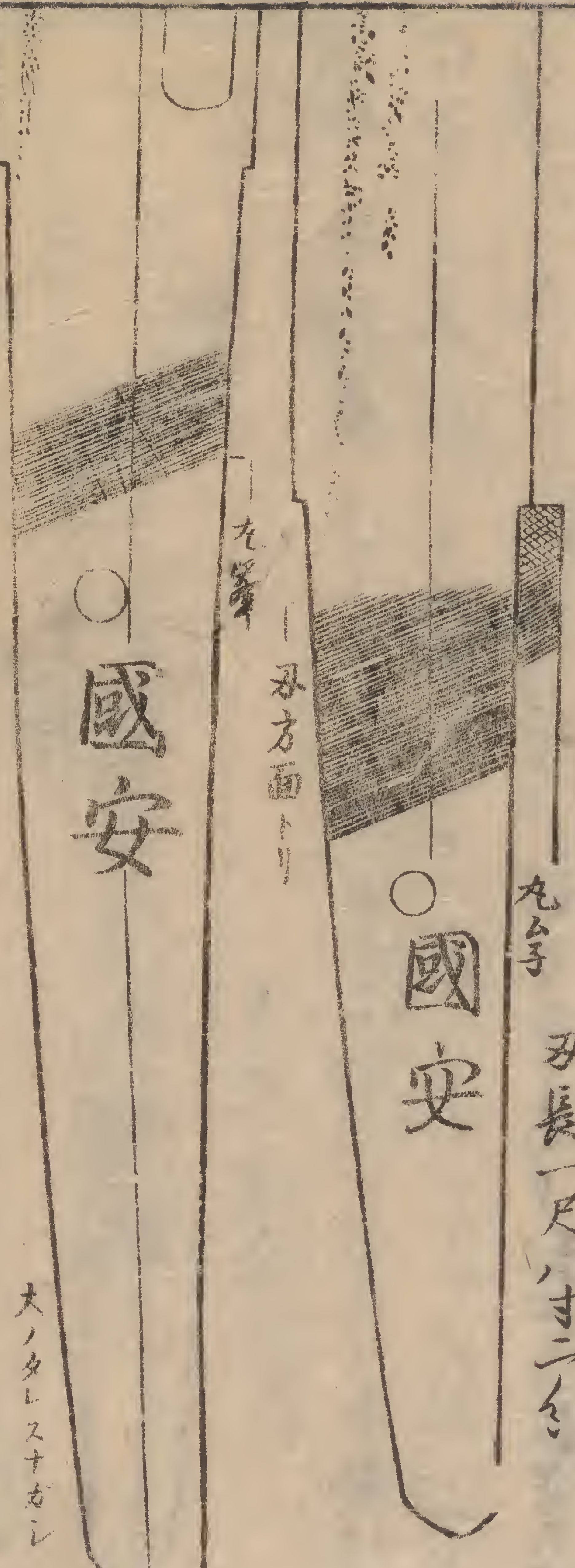
國廣ハ京一条堀川住信濃守と號す作名人と云事先哲の論する所詳
なり其古作の遺風有て一つ珍事に造れり地鉄細にして小疵多し
し後集ハ地金けんぜんと大和物なとの肌のやふにして純セり是偏偏
也と云つべし殊の外錦に而細直刃に出来しハ業物口物よりも似て有
又強く出来て荒錵多く井上真改に似するもまた二字銘に鉄物多し
此作年を捻ても切作物造に作る又山城國住出雲ハ洛陽と銘するも有
一書に國廣ハ元来日州飫肥伊東の浪落にて在京の中故有て人を殺害す
兵難を避て下野足利の学校に住す又外に國廣有摂州大坂伏見両所
にも住すと云り按に別人にあらさるへし是頃世嫌などへ堀川國廣所にて洲しし末
居し





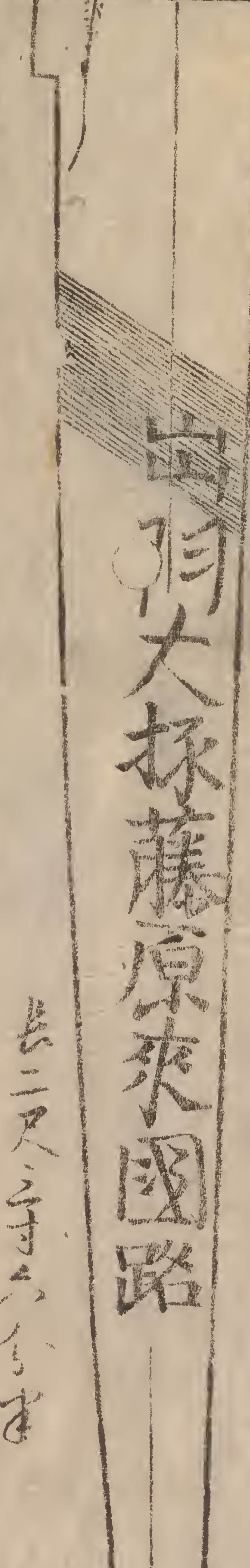
國儔ハ山城國住人越後守藤原也又二字ニ切銘多し此作地鐵細ニ小錵匂ひ深し都て國廣か作ニ同し来國俊の如きもの有大かた滅ハ聊か通る方なきも地金乾て見ゆる程すハあらん

一書ニ堀川國廣弟子國友ハ此手和泉守國貞大坂ニ住すと云按ニ是國広を以て記すゆへ友と儔訓を誤るものならん堀川ニ國友と云派給ひしはなど一字刀ばかりなりしん國儔か事疑べからん然れハ井上真改ハ此國儔が孫と見へたり其系圖ニハ國廣か弟子國貞と見へたり



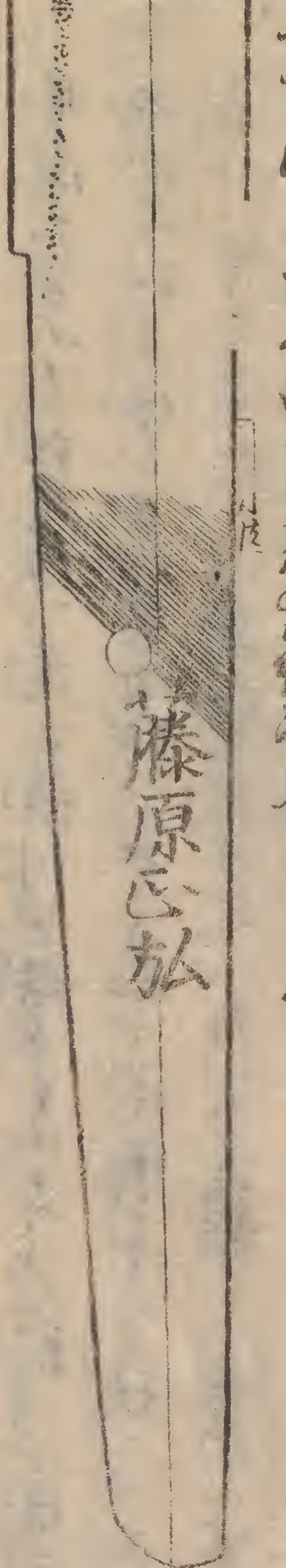
國安ハ平安城堀川國廣か弟也とあり國路同人なるべし此作ち...

て國廣ニ似たり中心ノ鑢ハ左へ筋違ひ峯ハ菱垣也ニテ小銘多し



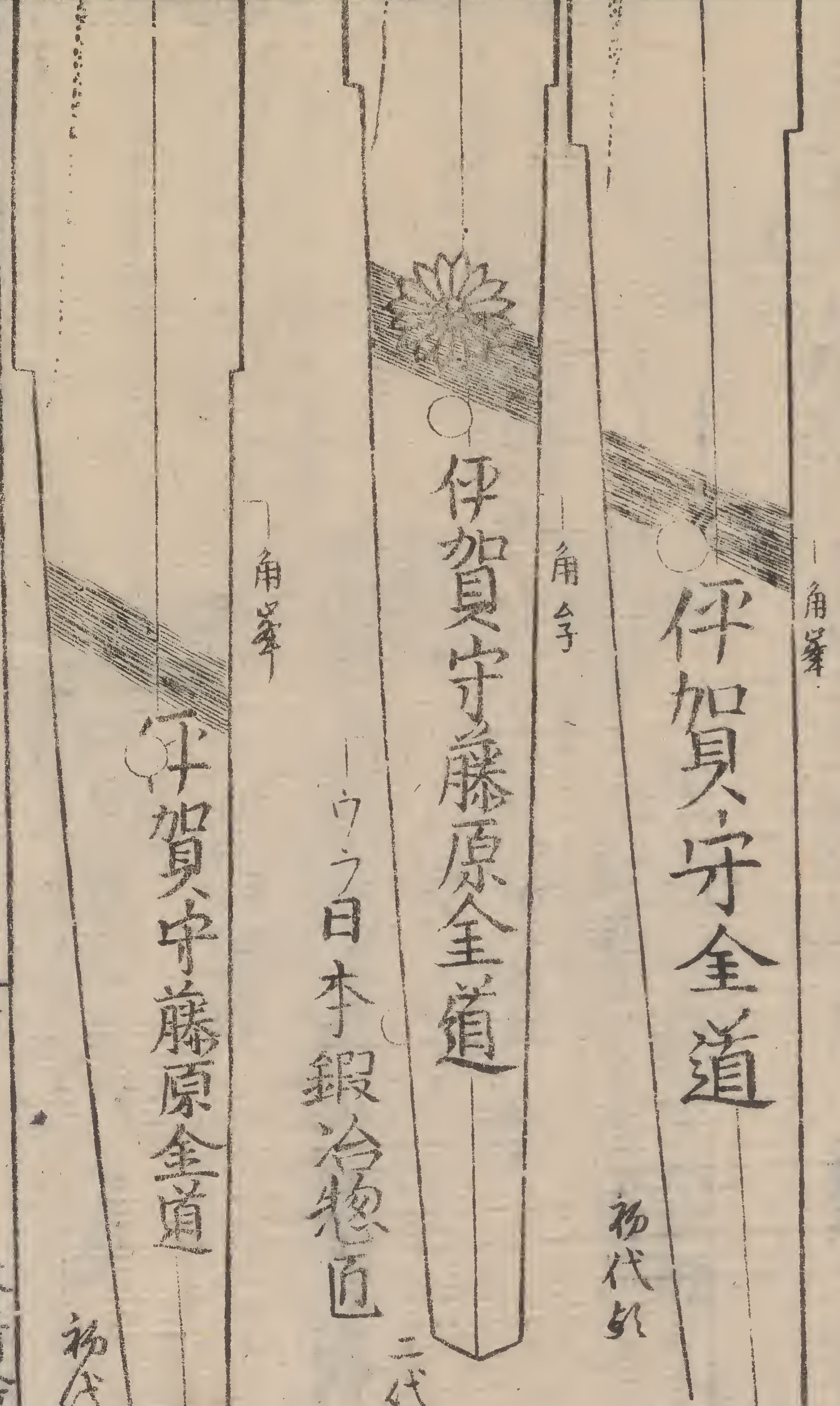
長二尺二寸六分半

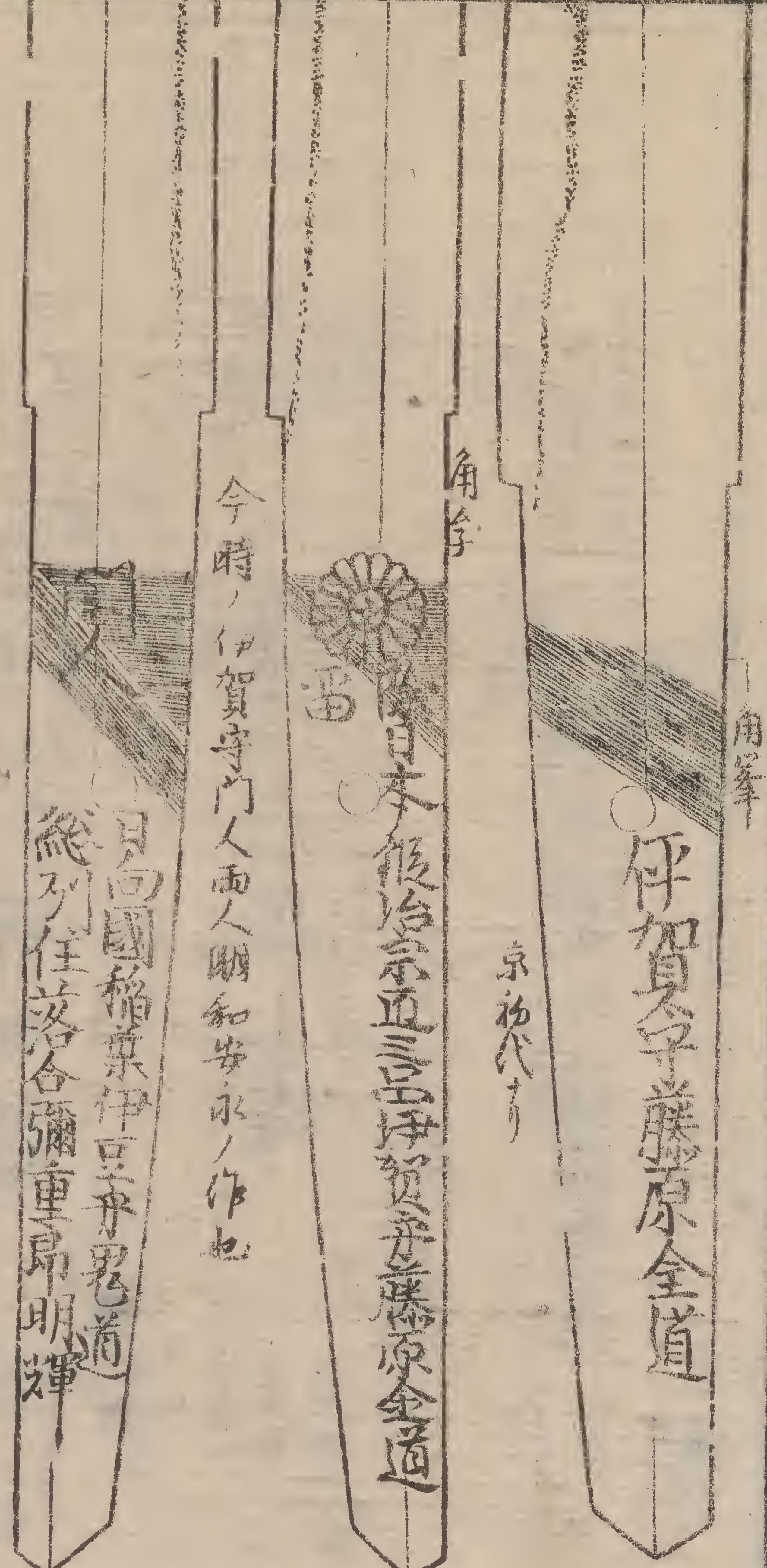
國路ハ堀川國廣の弟子出羽大掾藤原来國路と銘ある者初代也此作都て國廣ニ似たり出來の事ハ亂の足をつゞて大様ニ位有て来國俊の亂ニも似たり初代の銘片下りあり二代目銘者て小さかり或云豊臣家の鍛冶なりしと



正弘ハ後集ニ國廣ニ鍛まて代鍛冶を勤ると云 地鉄細ニ錵出来ニ

銘有堀出吉信同住なるべし又勝かたる物有或云大隅掾と切しも有と又日州古屋住大隅掾藤原正弘とも切せり

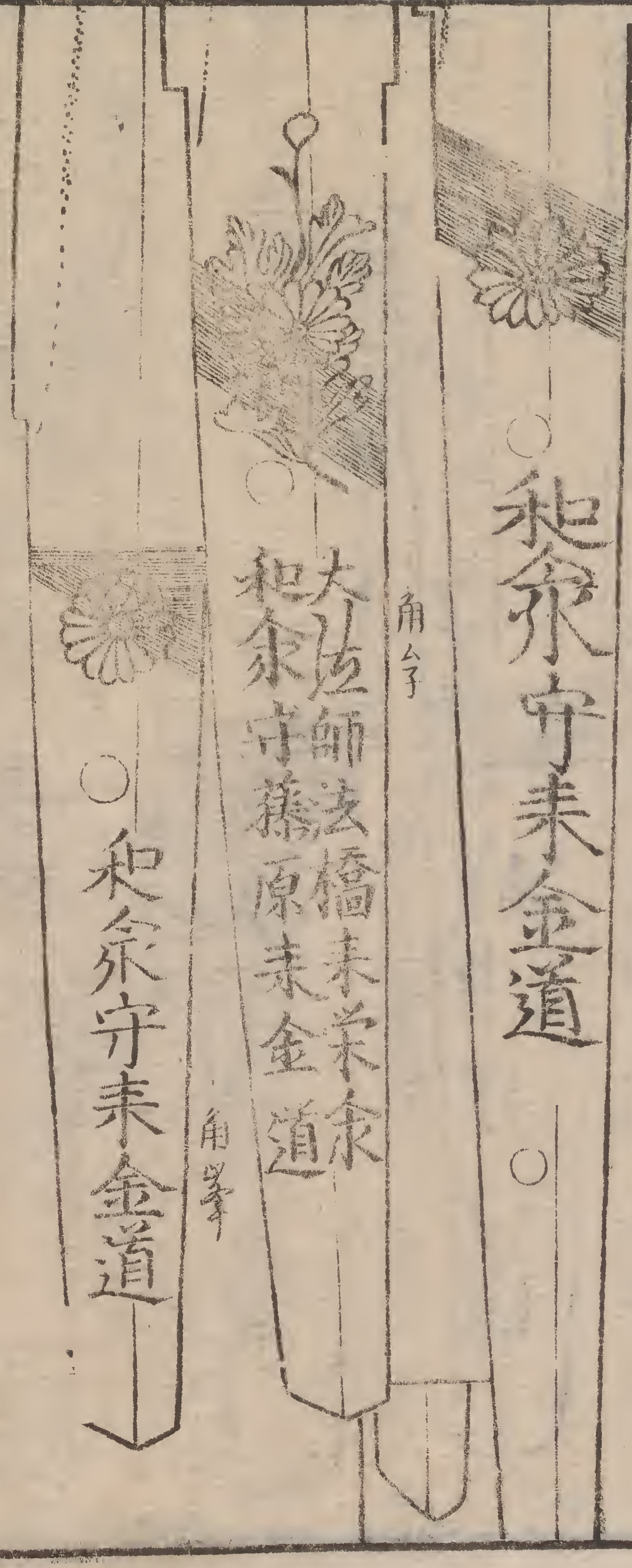




金道ハ京都五鍛冶の一人自ら衛鍛冶と唱ふ初代ハ慶長元和寛永比
也其作地鐵むらむらにして略國廣か地鉄に似たる多くも直刃也
延壽の刃に似たる物有其風にして反高く重ね厚く位ある又強く

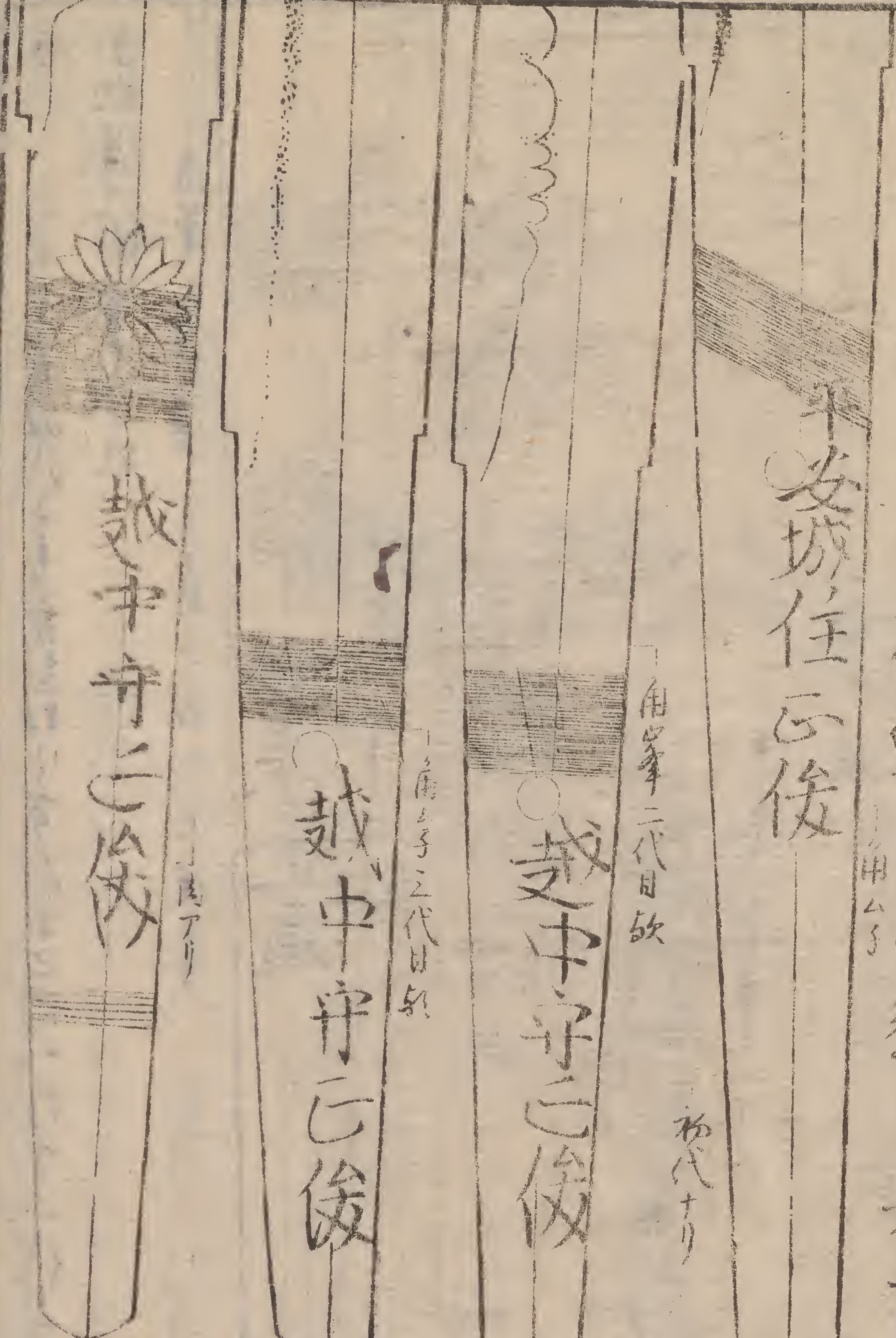
厚し地出来も有初代よりも業を切りて刃ありと見へたり二代目も上
手也但以下劣るなり

角峯大鋒文強クシテ小鋩白ヒ深シ刃長二尺五寸



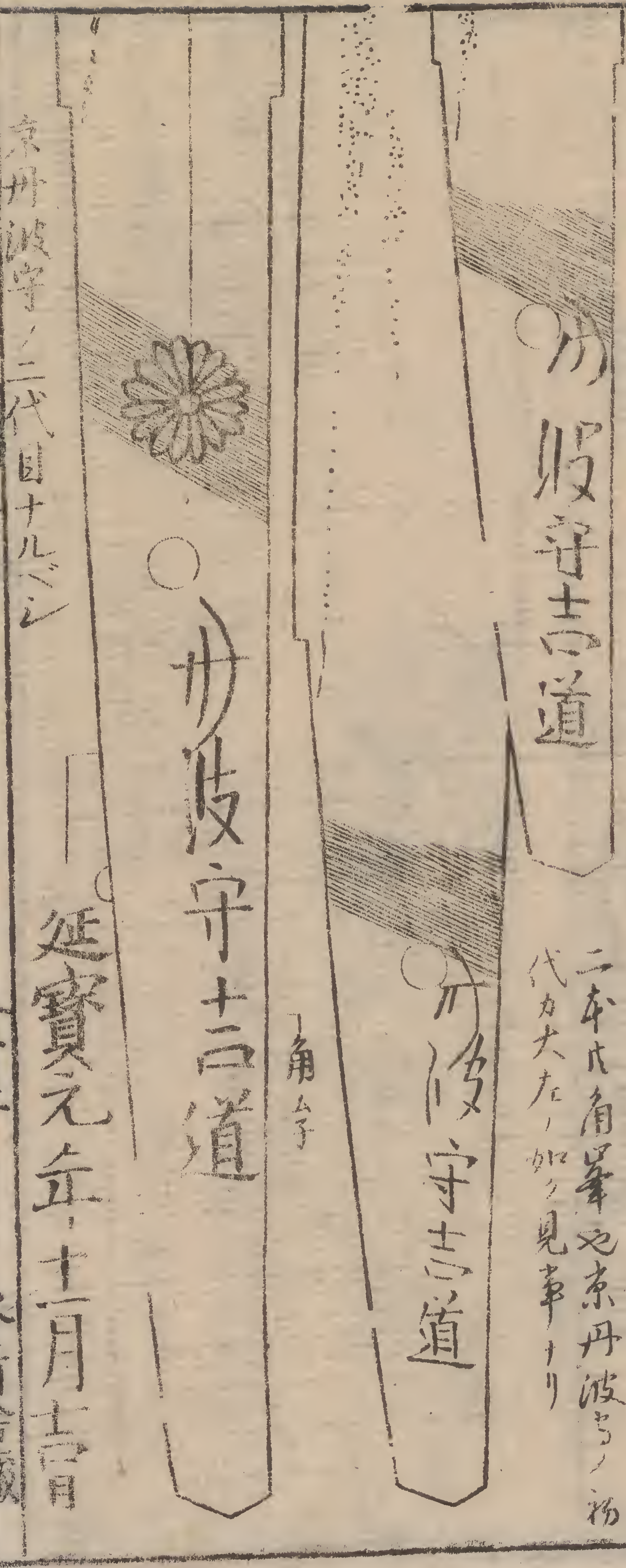
和泉守金道ハ伊賀守より別家也
一書ニ云時の所司代伊賀守殿より和泉守と改む和泉守名乗ハ伊

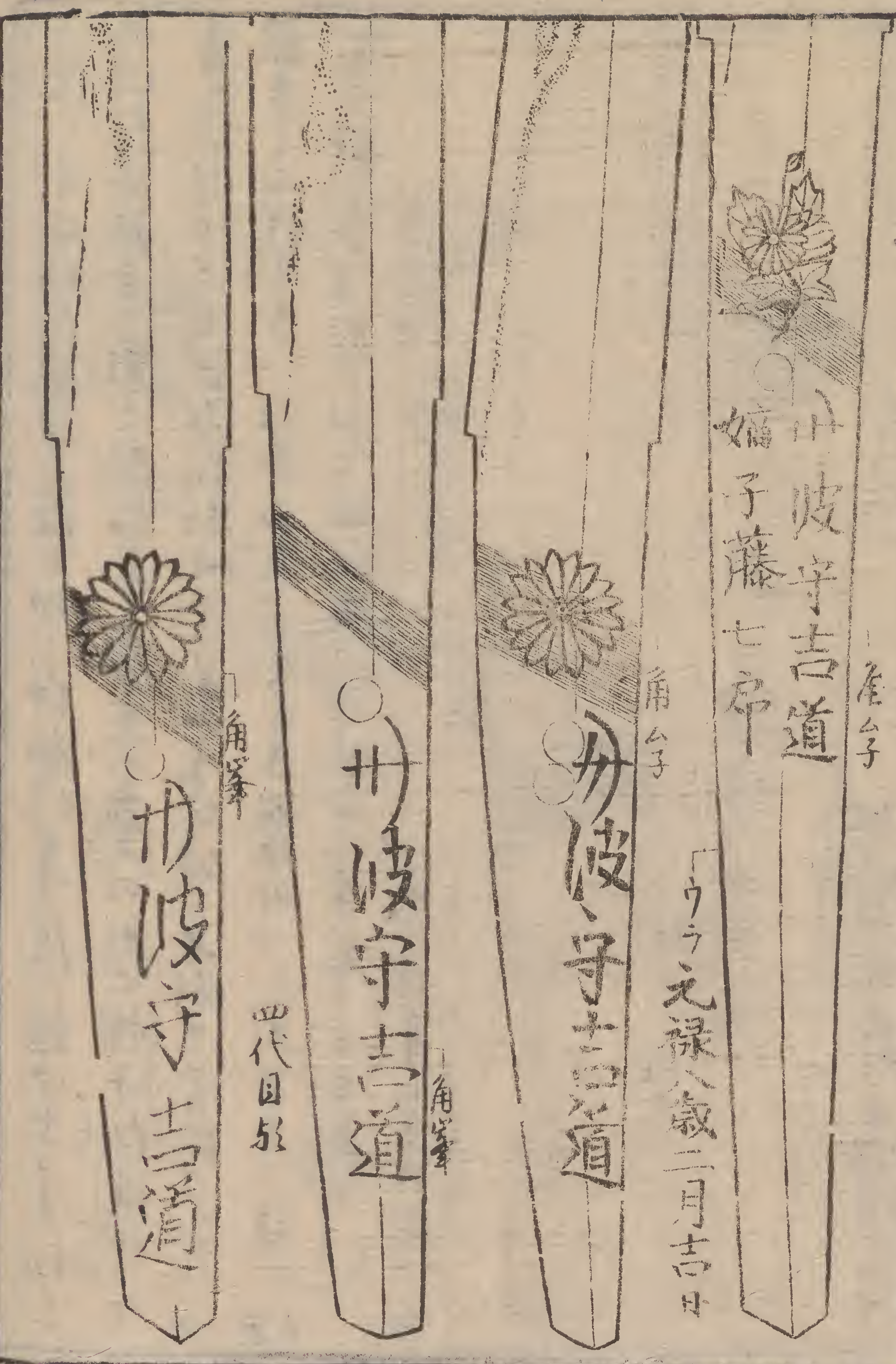
加賀守も切しは従兄弟ハ二代目伊賀守ヵ弟ふて別家せし者なりしん

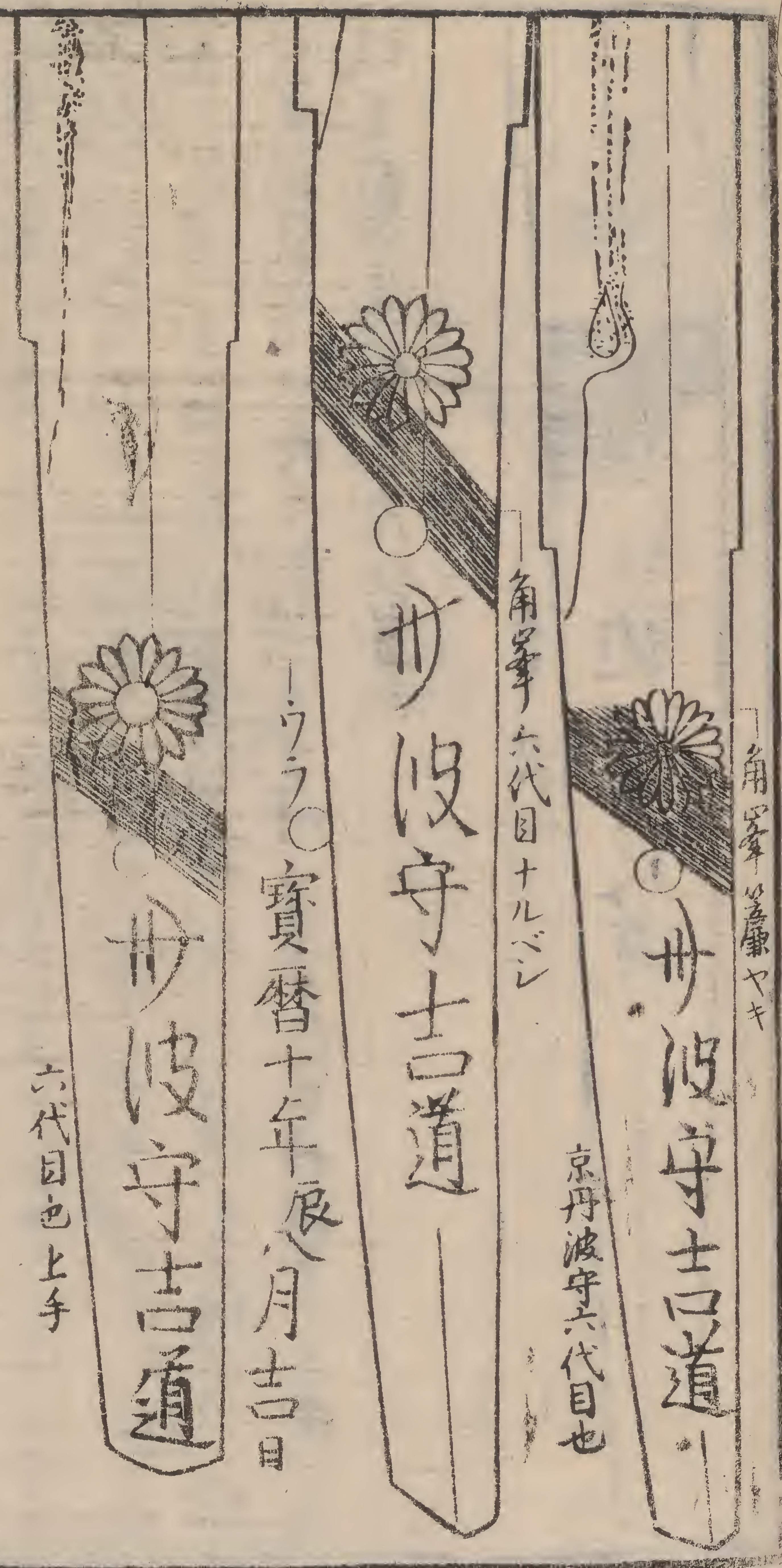


正俊ハ平安城住藤原正俊と切し初代ハ守す後ハ越中守とも切し
也此作地鉄至て剛く関和泉守兼定の如く帽子作広回りて
青江の新刀とも云在地物也業物の手ぎわ切し差別て賞翫也数代同
銘多し二代よりハ江守ふ子の大ず五郷治のつ人ふ至しが後ハ伊
賀守金道と同居す四代目正俊ハ伊賀守ハ子あり是も云至

二本共角帽子也京丹波守ノ初代ヵ大たノ如ク見事なり

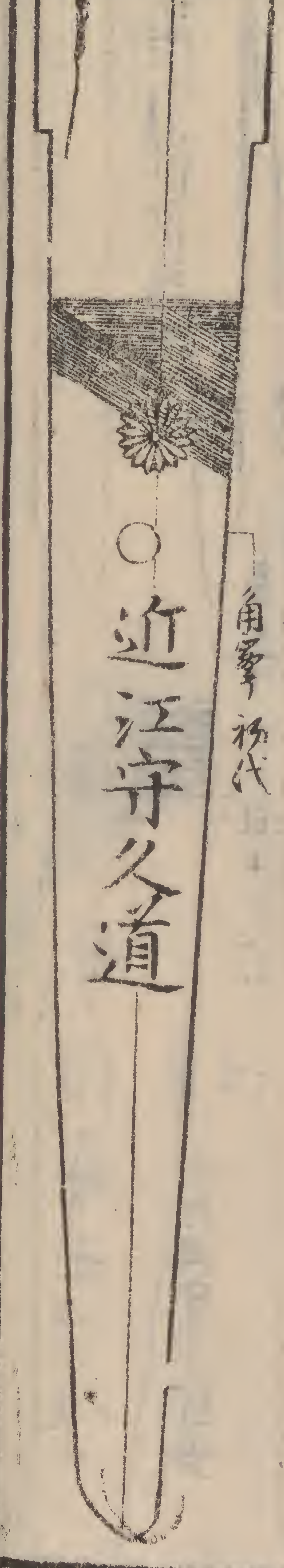


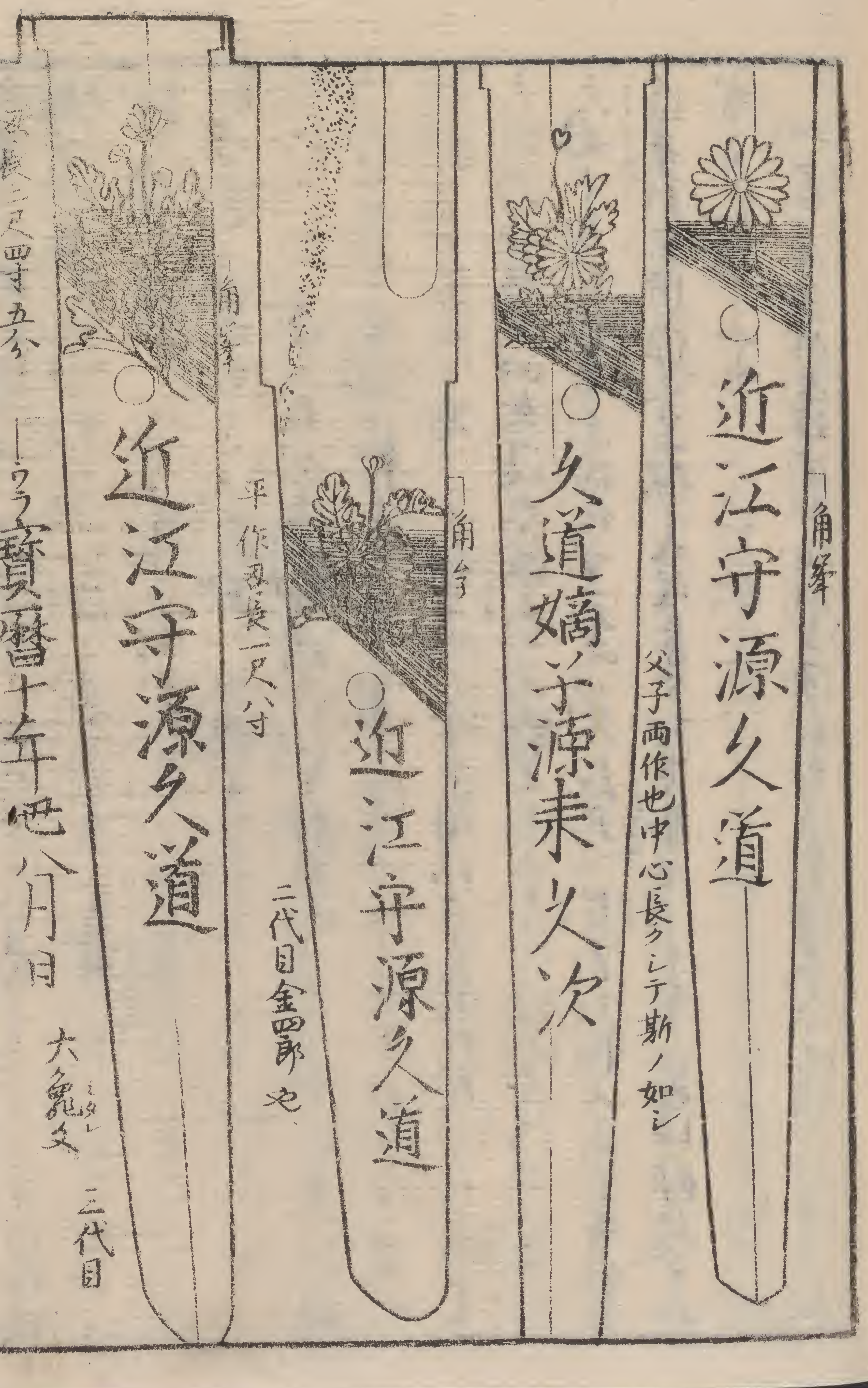




吉道ハ山城國京師の人丹波守ハ濃州関鍛冶の末也元和寛永の比より至今ニ至て連綿す元祖ハ地鉄細に潤く地の中一面よ小沸つよく沸え有匂ひ深くして白く大互の沸き物あり是作銘刀多く長劔ハ稀

也都て丹波守ハ摸様取の中に匂の心有此吉道ハ限り匂ひと顕に
見ゆるハ称也鑓子小筋違ニして銘の文字も有りて切角峯也中心
の先細し二代目より七の六代目迄ハ代〻十六葉菊の紋を切る大小
の違ひ有三代目ハ父よりも劣る也三代目も亦上手也四五代ハ今の
丹波守同位の物也初後集ニハ大坂丹波守か弟也ニ書せ置拙ニ非
ず〻ん京の元祖ハ慶長元和の比也大坂丹波守も大和守も家の祖
ハ万治寛文の比也是等以て考ふる時ハ京二代目丹波守の兄弟ハ大
坂両家の元祖なる歴然著也





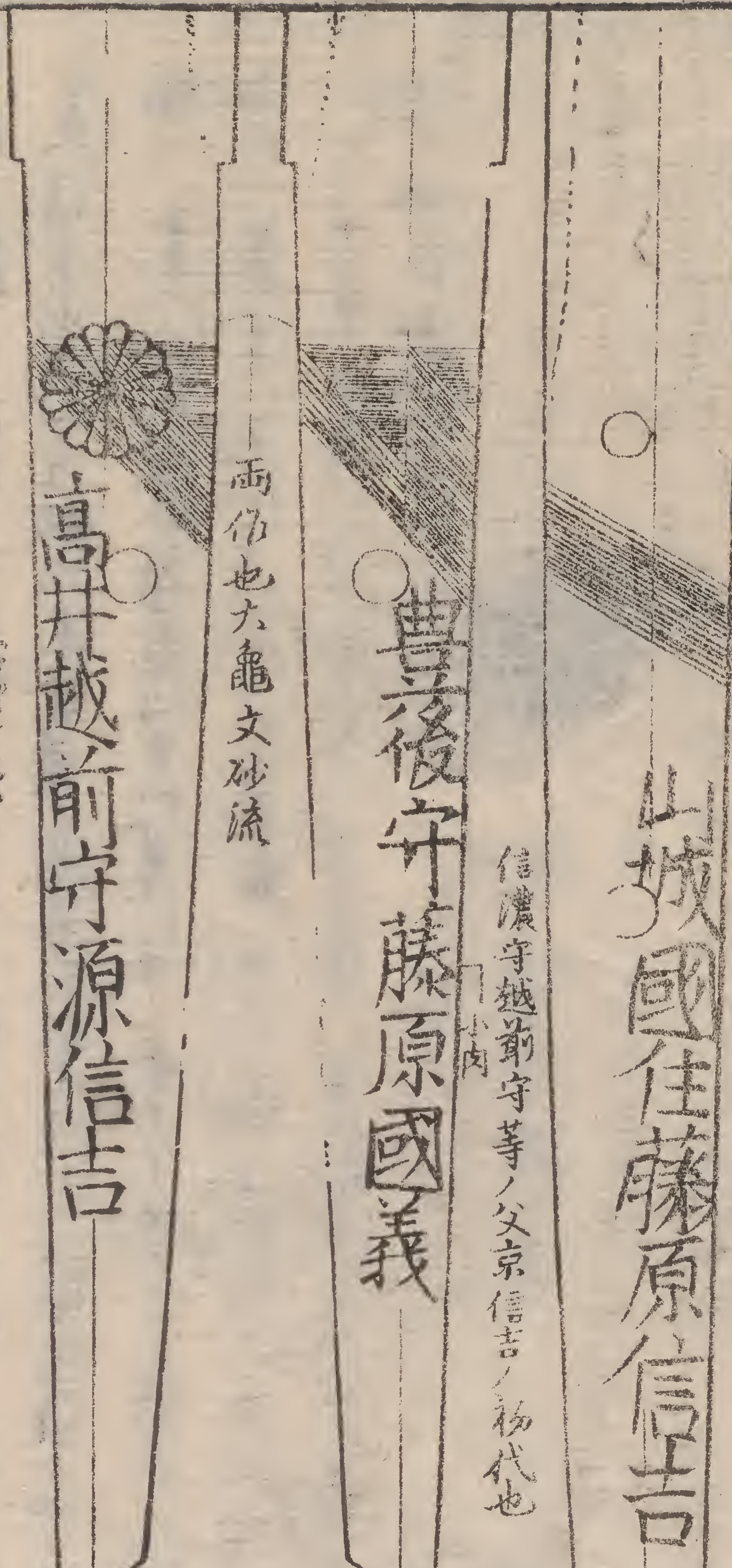
久道ハ京都五鍛冶の一人近江守か祖也金道か方より出たり其作地
鉄細にして小杢多く匂ひ深し関亀文多し直刃ハ刃の上きわざとく
湯て帽子能きよりして見事なり金四郎か如く声花にハ非れども古
風ニ質實の鍛冶也十六葉の菊一扇鑢すてさらしくさ切輪にて小さし
二代目初ハ金四郎久次と切後近江守源久道とあり銘に桐紋を切此
作地鉄細にして板目に小杢多く匂ひ有て深くいろいろの大亀文広く直刃大
濃にも花やかなり来ふ及ばず京鍛冶大亀文の作の一なるべし
大坂は四坂倉氏久道大亀文の三對とも云屋形物也三代目ハ享保
元文より寛暦中迄存命す元文四年江戸へ召まて鍛ふるも有勅命
遂奉於京師作之享保十五戌年と切て奉でしも有由也此作父より
劣らざる銘上手也

一書に肥前國鍛冶京住建部近江守源来久道業冶寛文の比嫡子久次と云

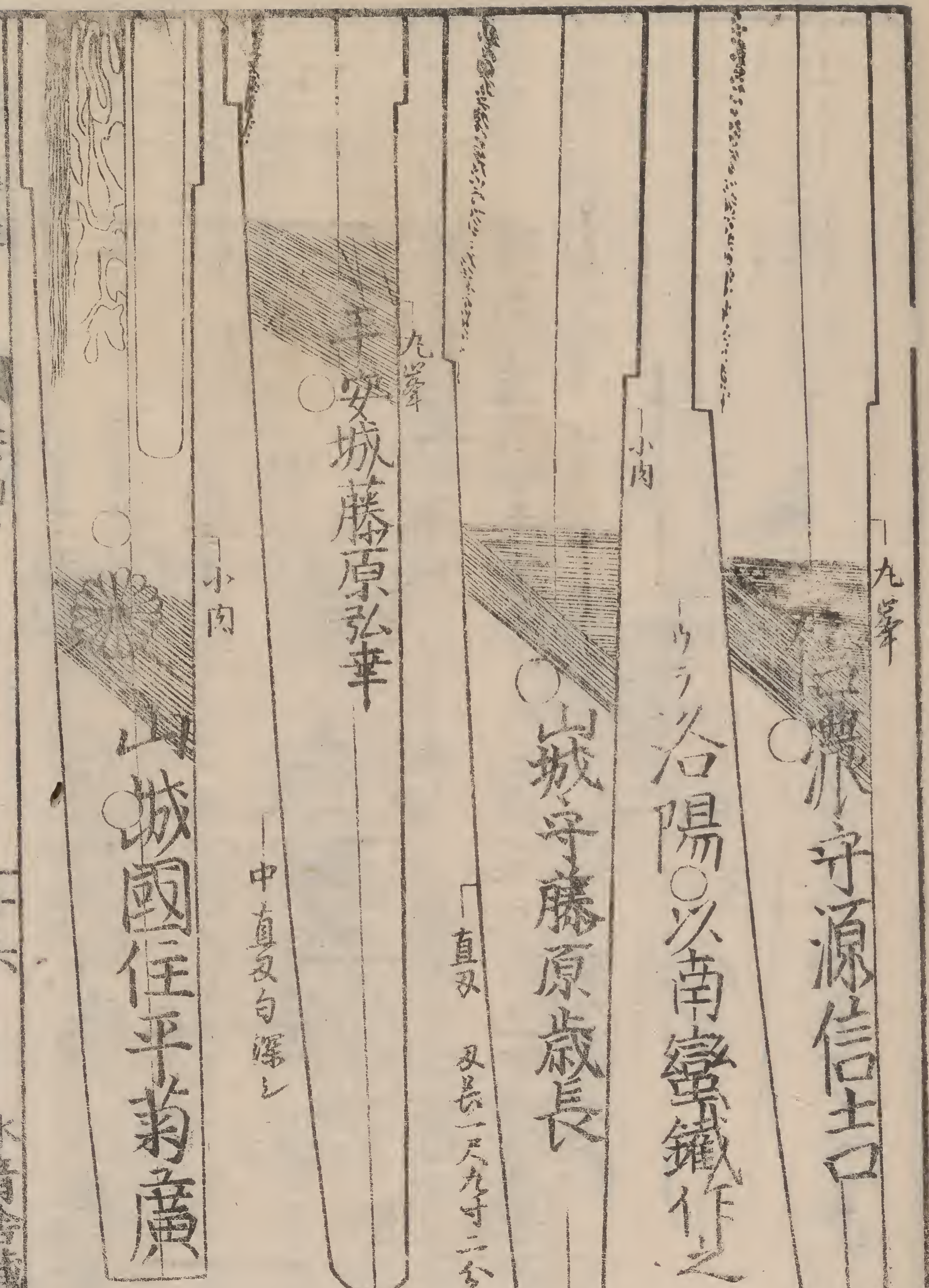
作も有と云祖ハ阿蘭陀人薬師寺四郎左衛門種永と云者鍛冶原ハ来生子湊
と号す正次が子近江守久道嫡子久次父子共に嶋原に住す又 禁裏御用勤
る久道有別人也五鍛冶来金道と同名ナル故三鍛冶 近江守久道と切と云
按に一書の嶋原住京都近江守久道と同人なるや疑ふし和泉守久道
ありし事未だ聞ずとへども二つを並て考るに嫌疑無き様にせらし紋國
行しまぬん文三鍛冶ハ當に三品なる歟し一書ハ聞侭に記す故誤ること
覚ゆる鍛冶ハ三品と称す

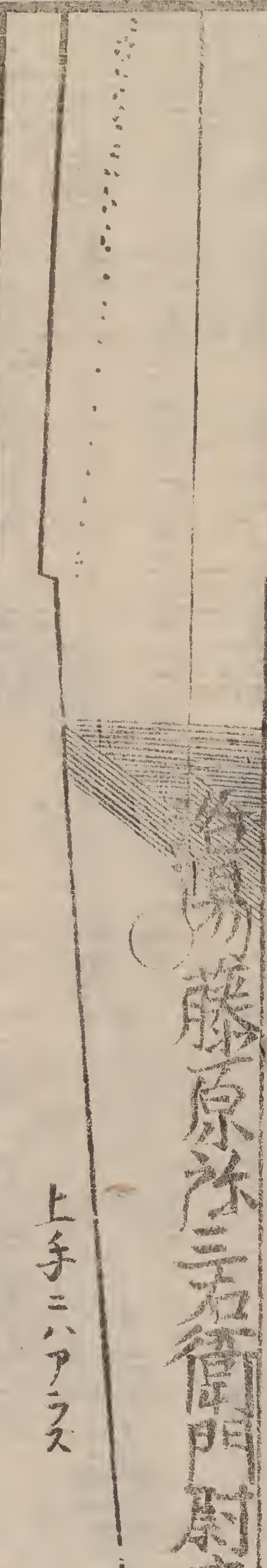
来大佛のぶ道に住す近江守久道が一人也一説に和泉守金道が門人とも云
此作地鉄がんらりと三代目の久道に能似て重ね厚く刃文も有大

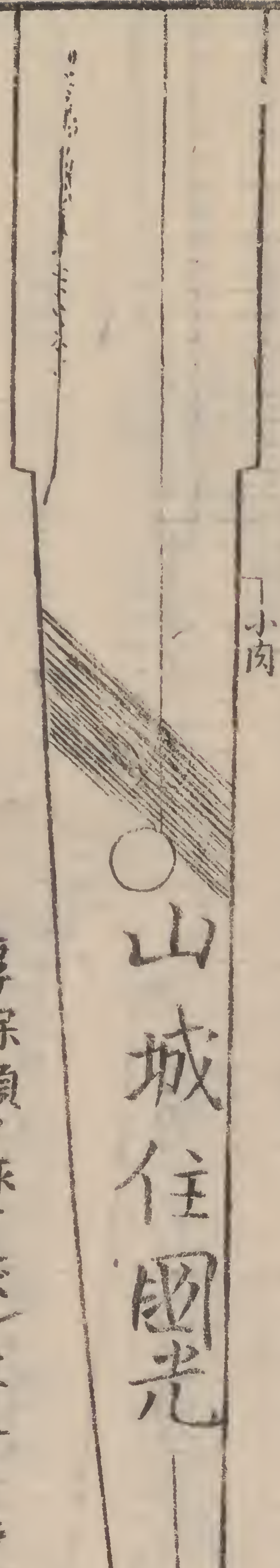
是又尾張や京都地也藝州の大守扶持し給ふ一人平七郎ましの子を
養子せしゟ石堂にして二人共に墨等平七八植かそりまて上手也



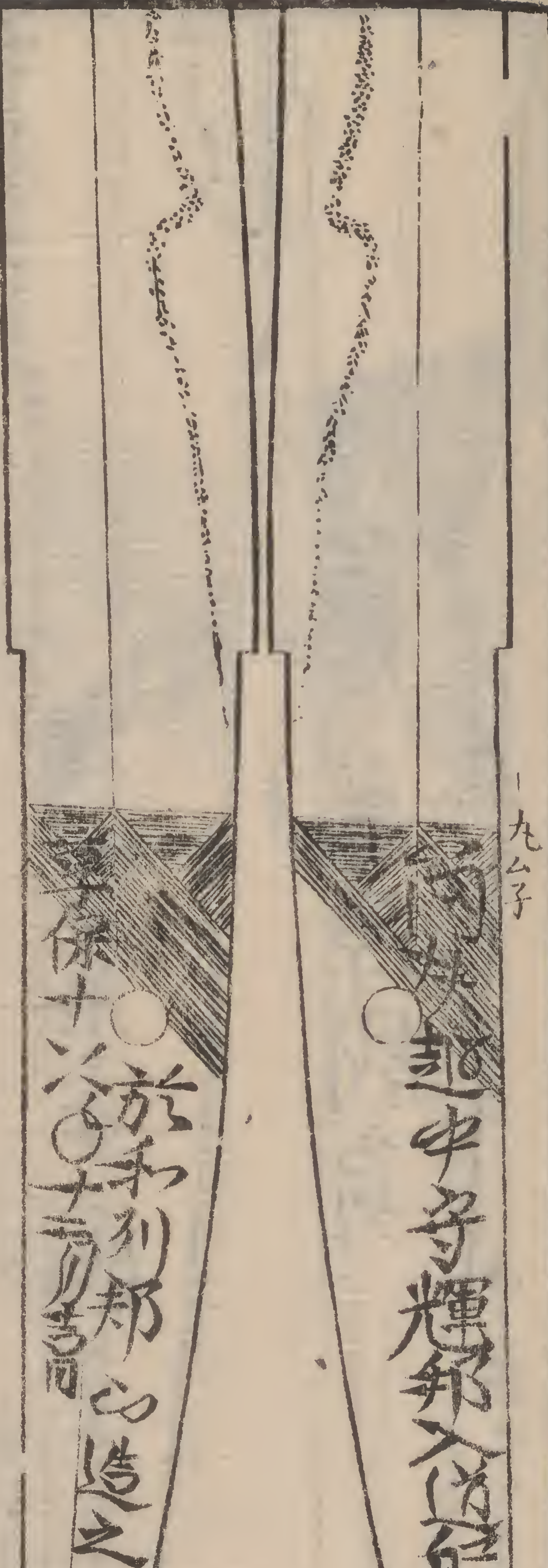
越前守信吉ハ大坂の所ニ銘ニ書セり豊後守ハ京洲崎ひ江州彦根
又ハ小濱等西にに住す大坂ニても打しゟ越前守を京せし事有之



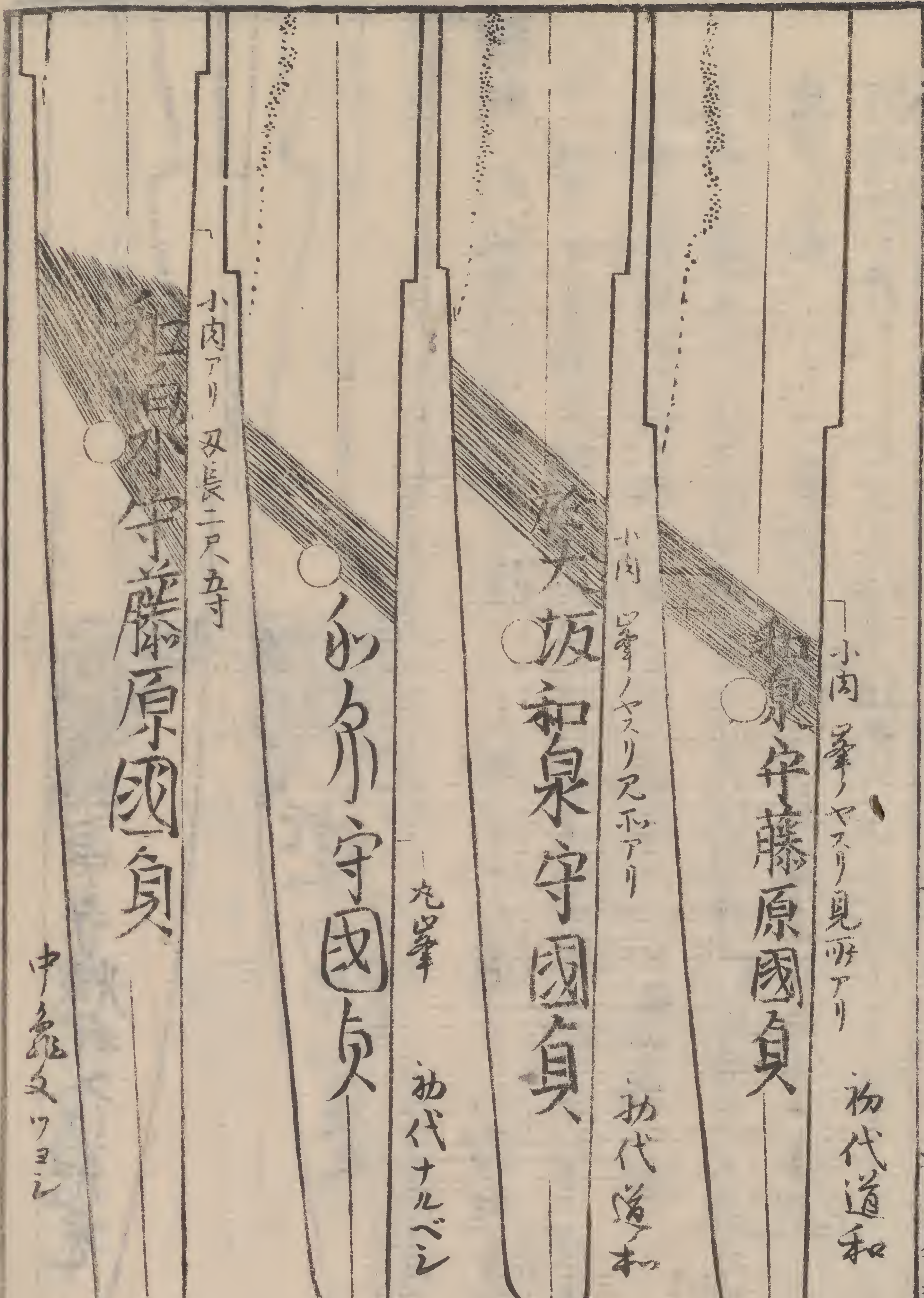


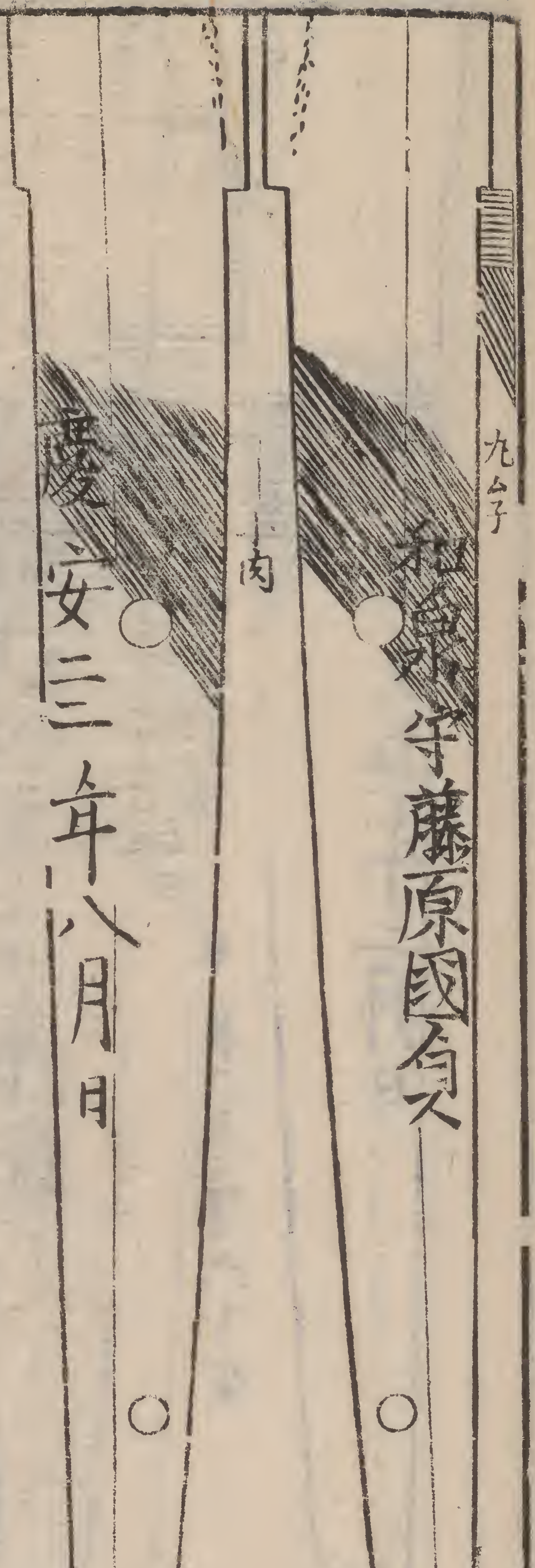


後集にハ國知れずと記せし處摂州平安城の人なりん又豫州宇和郡吉田の雖治まて暫く在京せしと云る人を蓋し同人なるべし

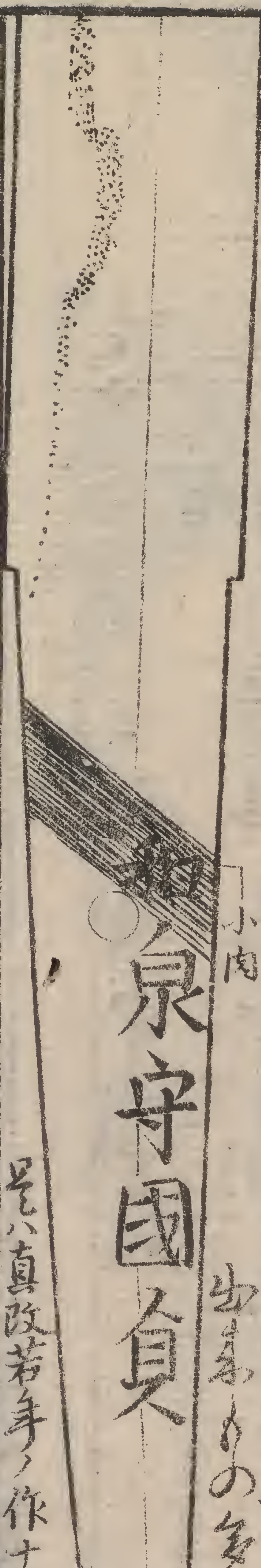


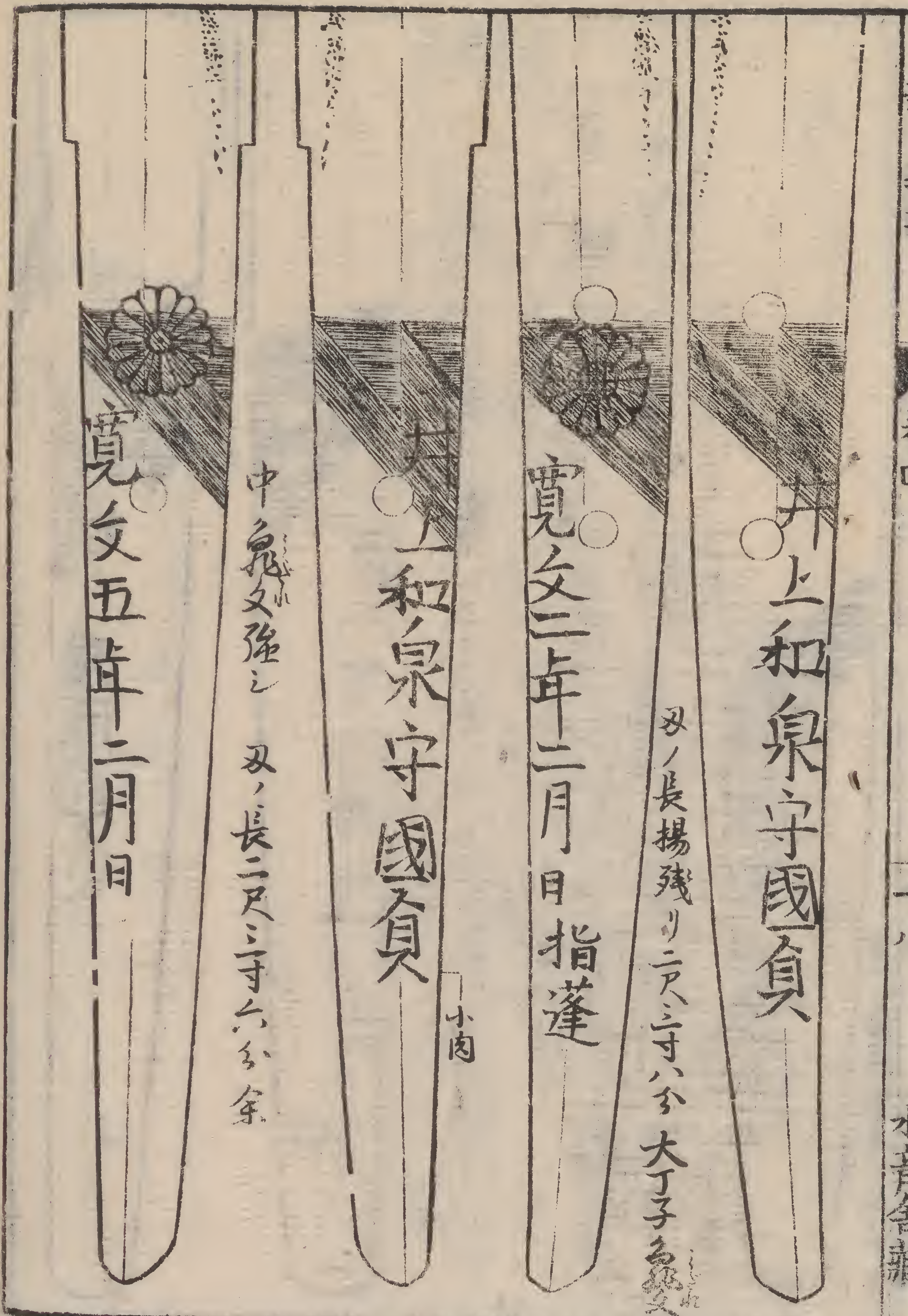
輝邦ハ大坂丹波守初代吉道が門人越中守包國が子也輝邦も若年の時ハ越中守包國と銘す此作なべ不劣なき上手也大亀文度ありて文濟多し
一書に輝邦が父包國ハ初大和守吉道二代三品四郎兵衛が門人也後大和國手掻包保の末葉にて大坂住中川陸奥守包康が嫡陸奥守包朝が門人と末銘も摂州の住包國と切る其子入道紀充も河内横小路大和郡山に住す紀充が子も郡山に住すと記せり

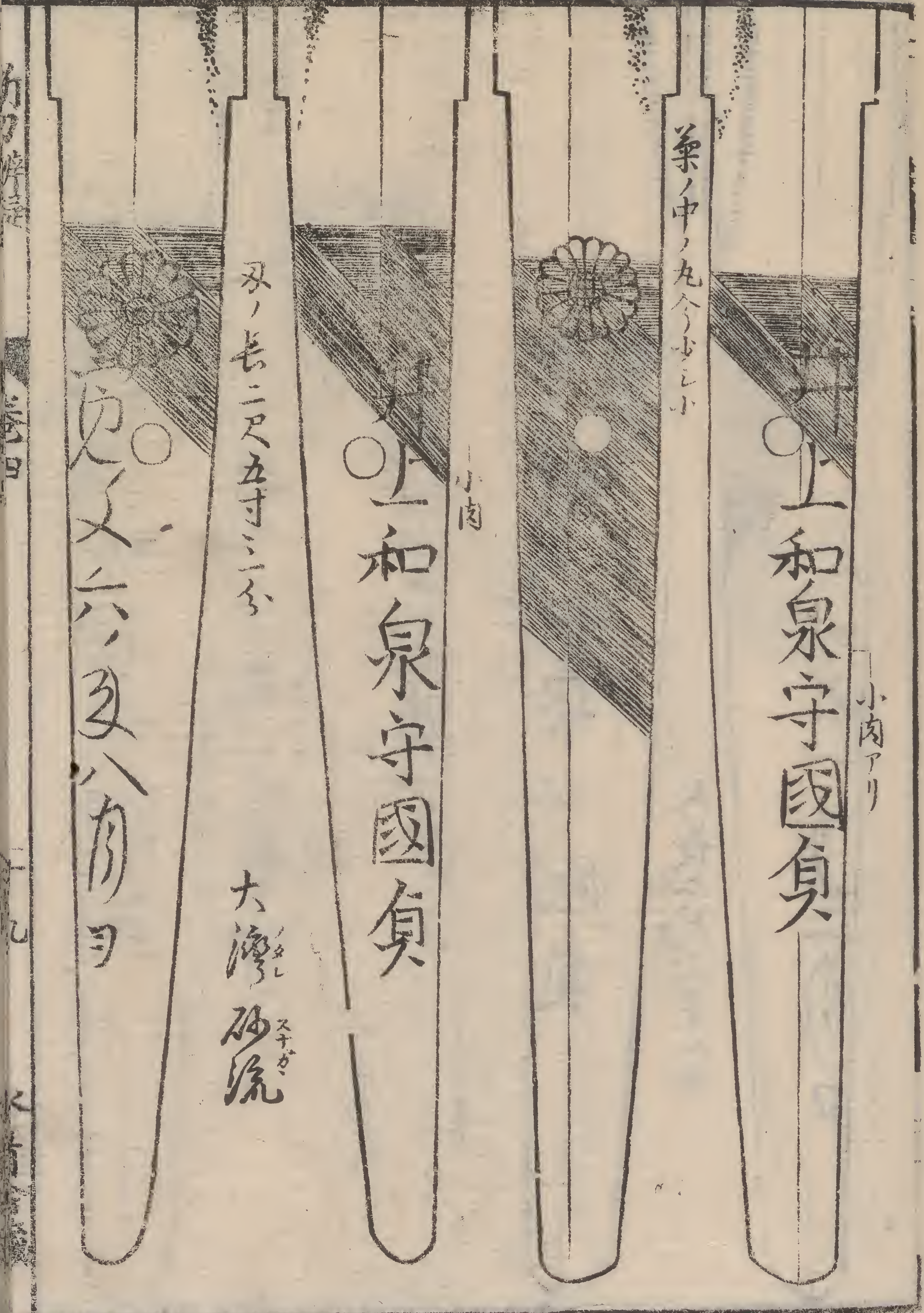


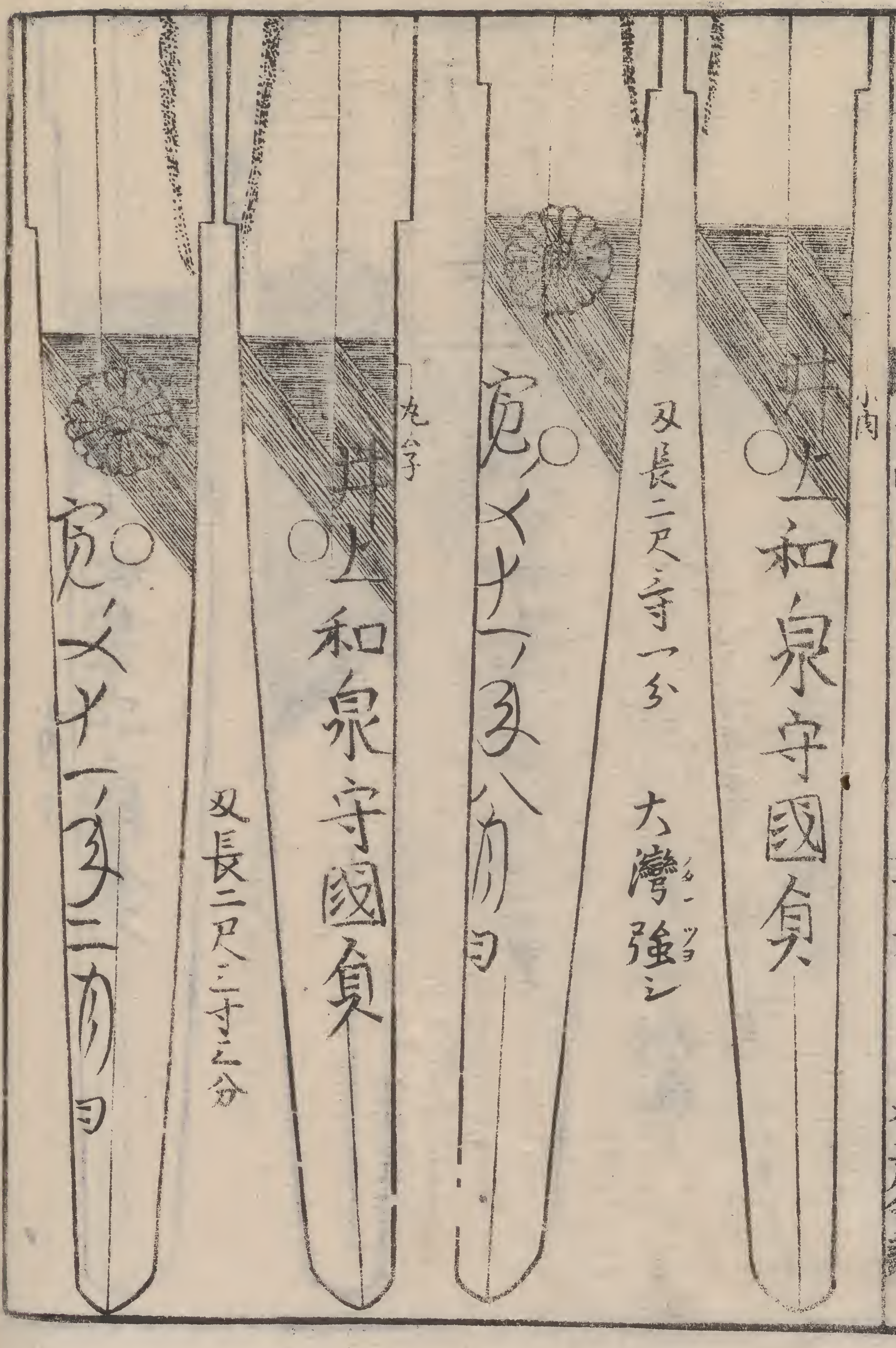


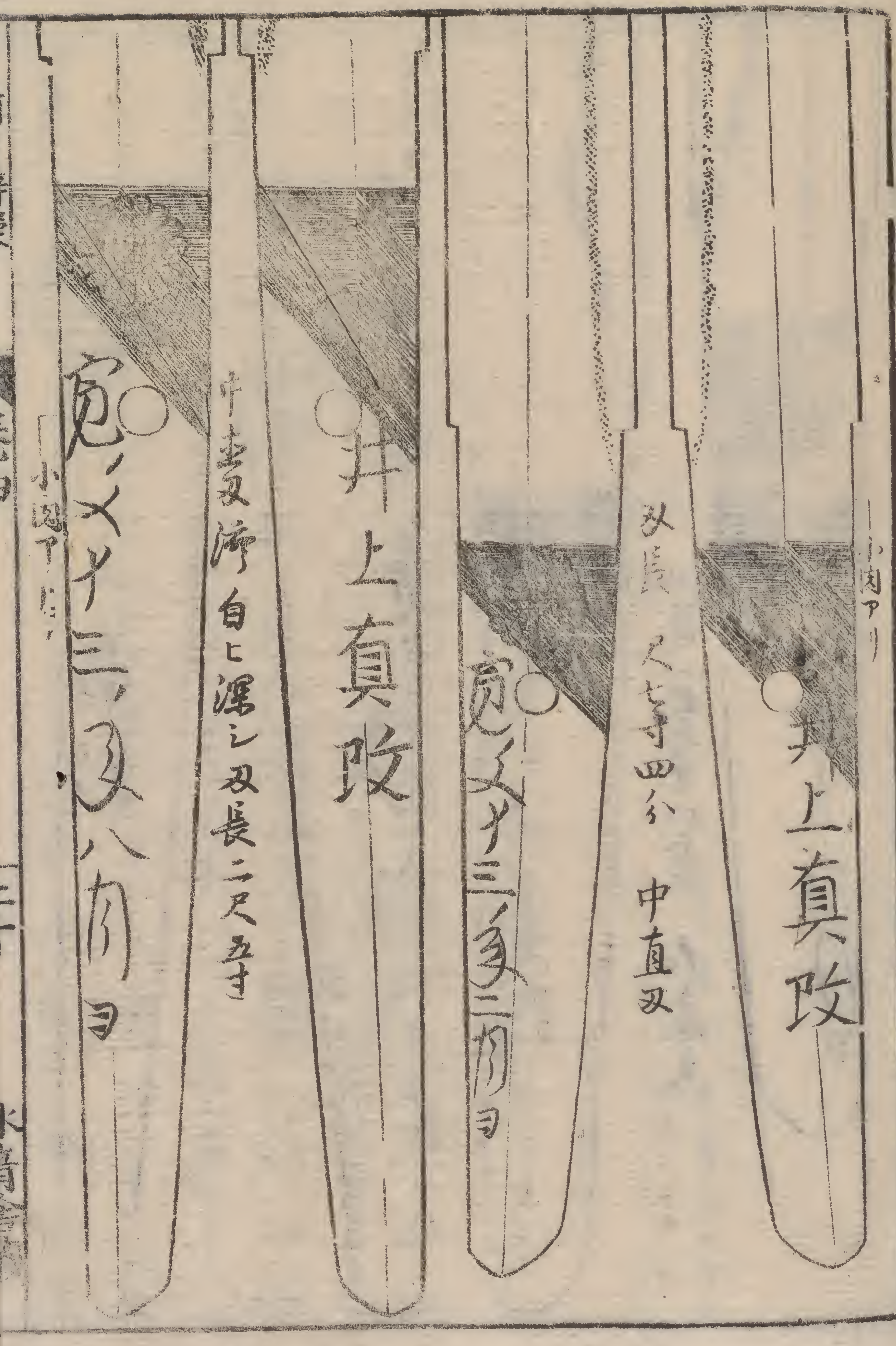
國貞ハ摂州大坂住堀川國廣カ門人にて井上真改カ父也於大坂和泉守
國貞と切しも和泉守藤原國貞と銘するも同作也
一書ニ堀川國廣カ門人國安カ子大坂和泉守國貞也と云國貞カ評定
の部ニ詳ニ有真改カ作ニハ劣れとも國儀ニハ同位の作也於大坂と切しハ
出来よきもの多し

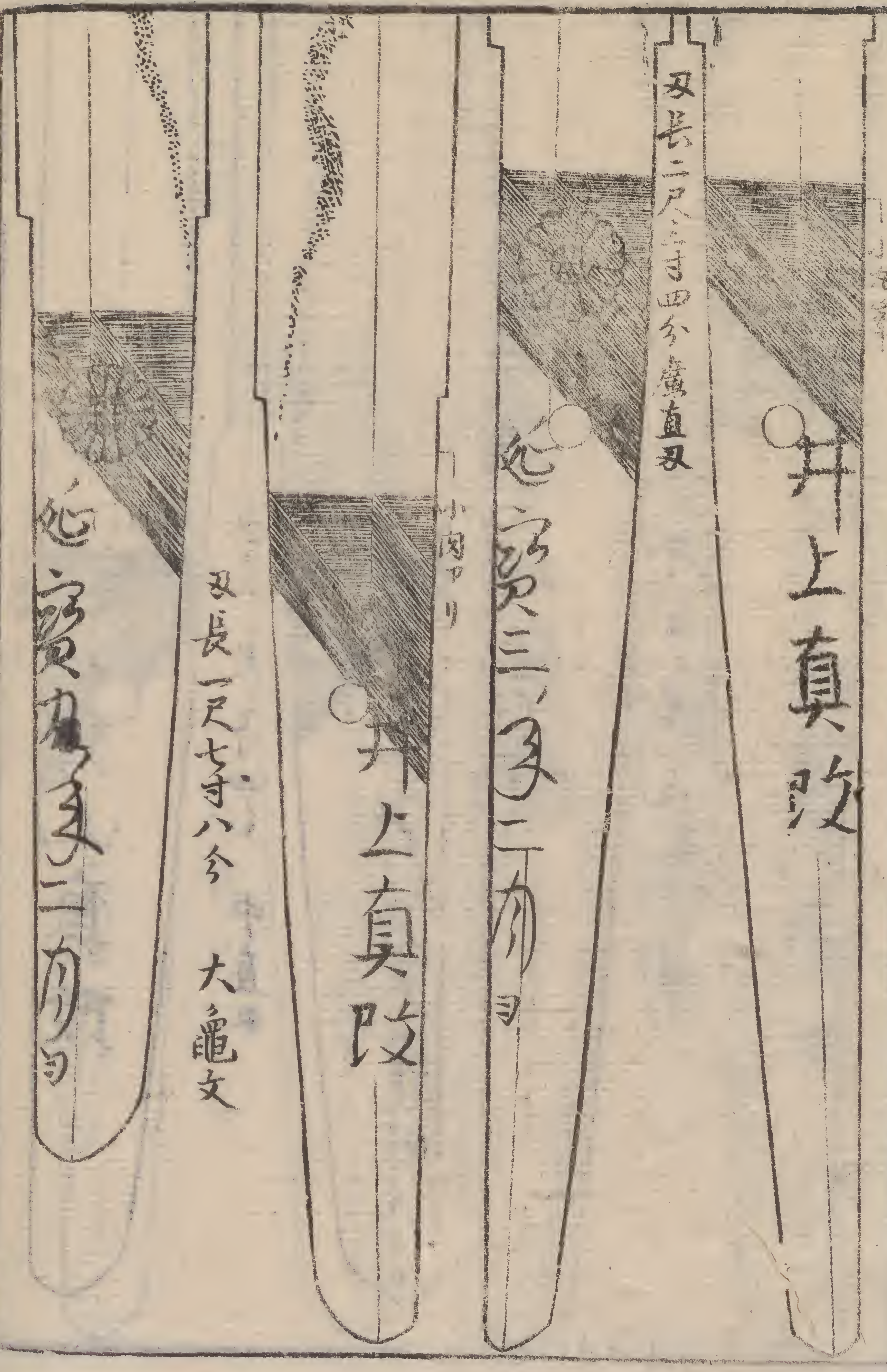


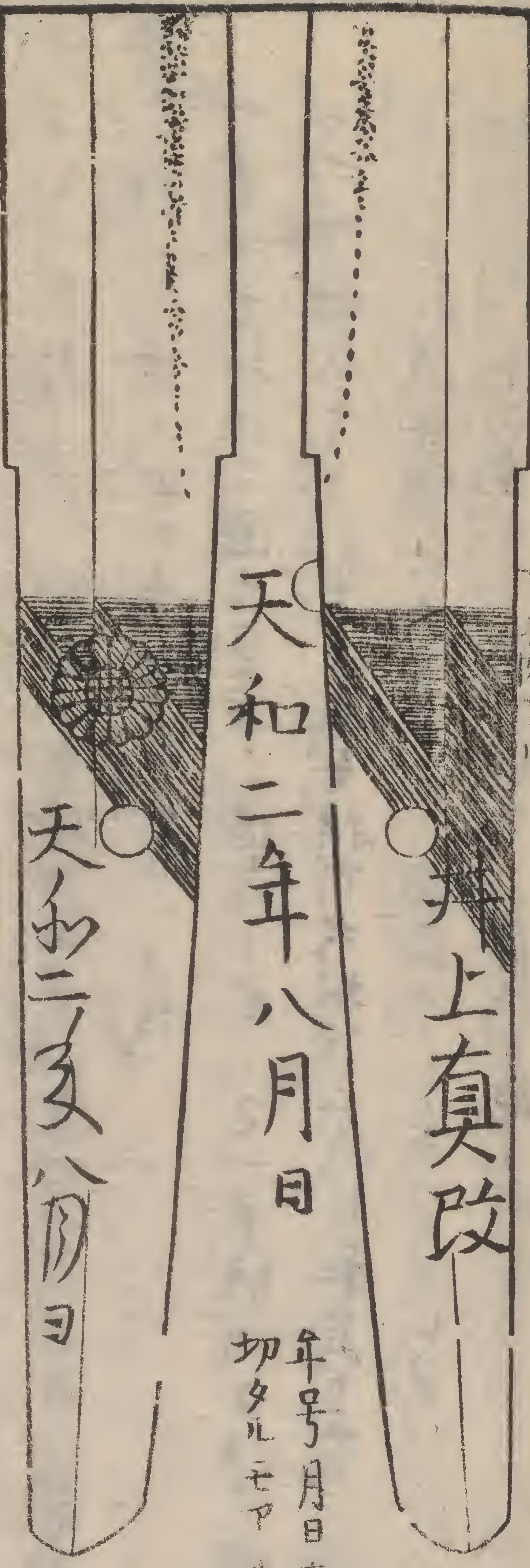

井上和泉守國貞
刄ノ長揚残リ二尺二寸八分　大丁子乱
寛文二年二月日　指蓬
井上和泉守國貞
小肉
中乱文強シ
刄ノ長二尺二寸六分余
寛文五年二月日


井上和泉守國貞
小肉アリ
茎ノ中ノ丸ク少シ小
小肉
井上和泉守國貞
刄ノ長二尺五寸三分
寛文六年八月日
大濤砂流


小肉
井上和泉守國貞
刄長二尺二寸一分
大灣強シ
寛文十一年八月日
丸分子
井上和泉守國貞
刄長二尺二寸二分
寛文十一年三月日


小肉アリ
井上眞改
刄長二尺七寸四分
中直刄
寛文十三年二月日
井上眞改
井叓淬白ヒ濯シ
刄長二尺五寸
寛文十三年八月日
小肉アリ



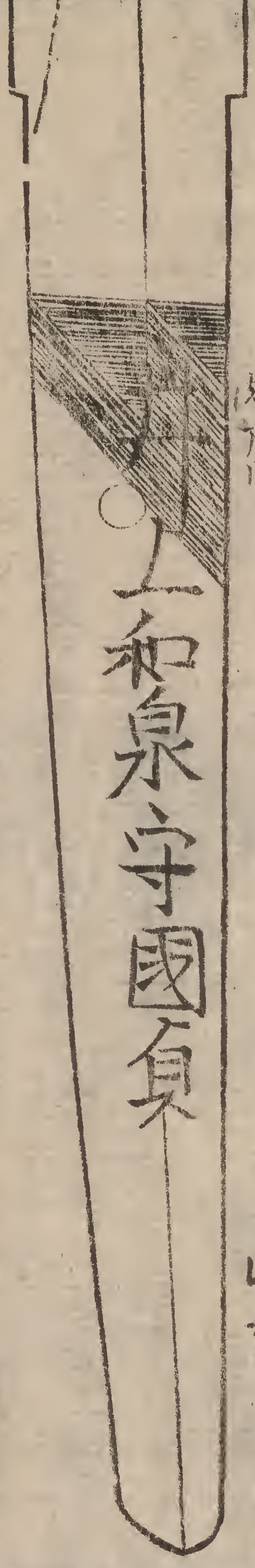


井上真改ハ摂州大坂住人和泉守國貞の二代目にて明暦万治の比ハ井上和泉守藤原の字ふく和泉守國貞とばかり切偶年号月日をも切しハ有きぐ頃ハ菊彫のごとし寛文三四年の比よりかくのごとく切るなり寛文の末真改と為て又初の菊を用ゆ楷書述がたし所有寛文四五年より年号月日も草書ふ切是大坂新刀也此作初の程ハ丁子乱文関亀文又重花も有以前ハ地鉄きれて強く堅き物ふし焼も別

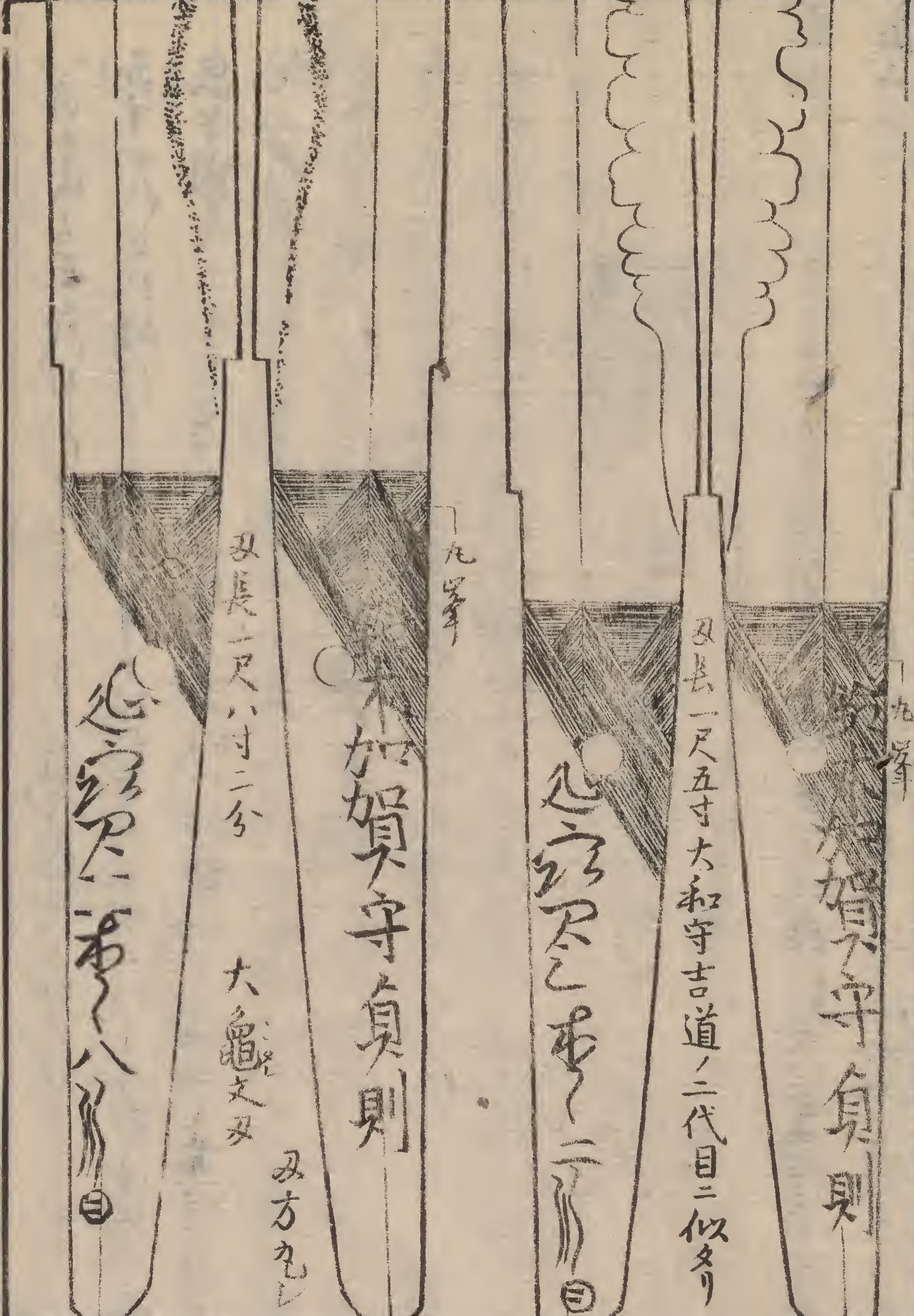
ことして刃の上にて先も寛文の中比より津田越前大乱文作とも
地鉄鍛錬丁寧に光り白ひ出て深く勢ひ盛て何れも物深く能く
出来たるは昔の五郎入道正宗にも劣ざる物ありと雖ひ板目見雖ひ
流くのるも造立たる鋒少し伸て横手筋の下まで地鉄精出して帽
子丸く締りてかし尖る心有横手筋より帽子の内鎺細かに白ひ刃
て深く強く延る也帽子帽子有といへども丸く返りさるを書数
すなわちの形強くあるいは彫物の手際路の手跡余人の及ばぬ所にあらば
實に稀なる名人世の賞する不宜なる哉

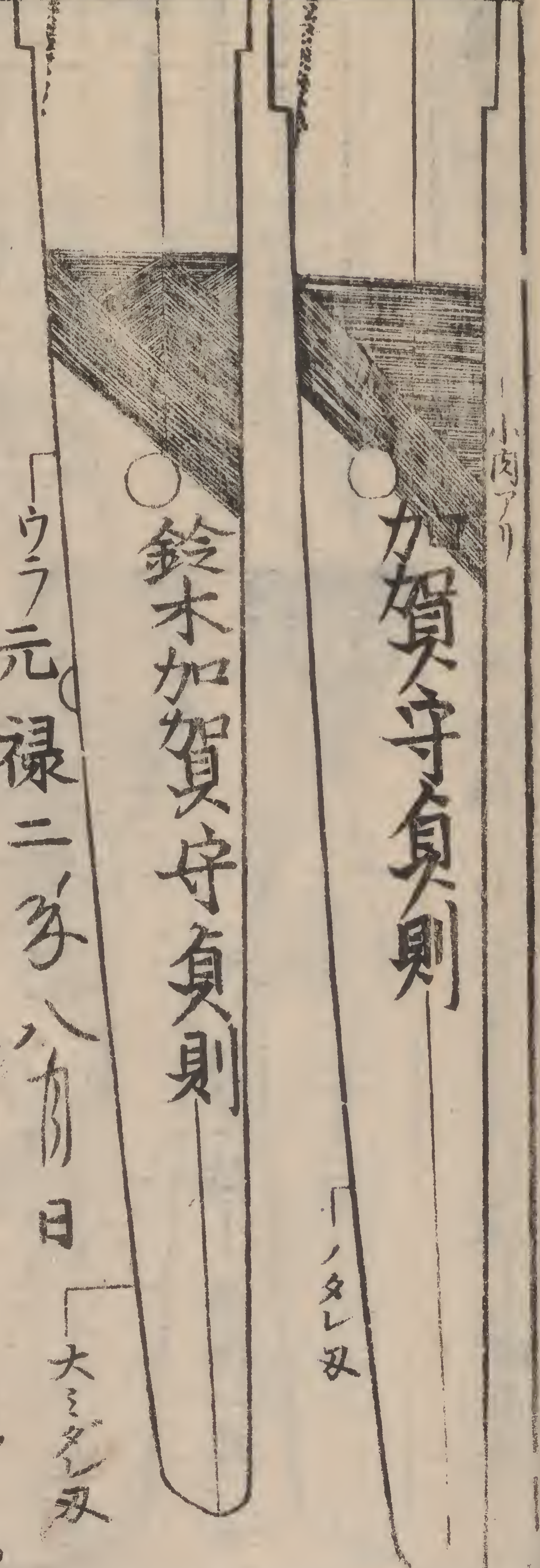
一書曰元祖肥前國古屋信人國広上京して一条堀川に住す國広
が門人國広の子和泉守國貞摂州大坂住二代目和泉守國貞
後井上和泉守國貞と切或は平國貞又ハ和泉守國貞と此のごとく
切寛永八年二月より菊を切井上真改と改る彫物の上手也井上

八郎兵衛と云ふ三代目八門平と云ふ是も和泉守國貞と切大坂にて乱心
死す四代目川清作を嗣後つ平と改む日州飫肥に住し子孫連綿す和
泉守國義も是も同書に井上真改ハ伊勢神戸國助か弟也と云り
始に云る条理有と雖ひ不用ゆん又家来の内平安城研師井上真改
と云者に聞しに真改ハ過酒して終に井に落て死すと云ふ
真改の父ハ真改か弟の友且終か研師也叔父寛永八年より菊を切と
也寛文よりして其ハ年の所合す然とも寛永寛文の違ひ有も何とも是ハ疑し
此説用ひがたし

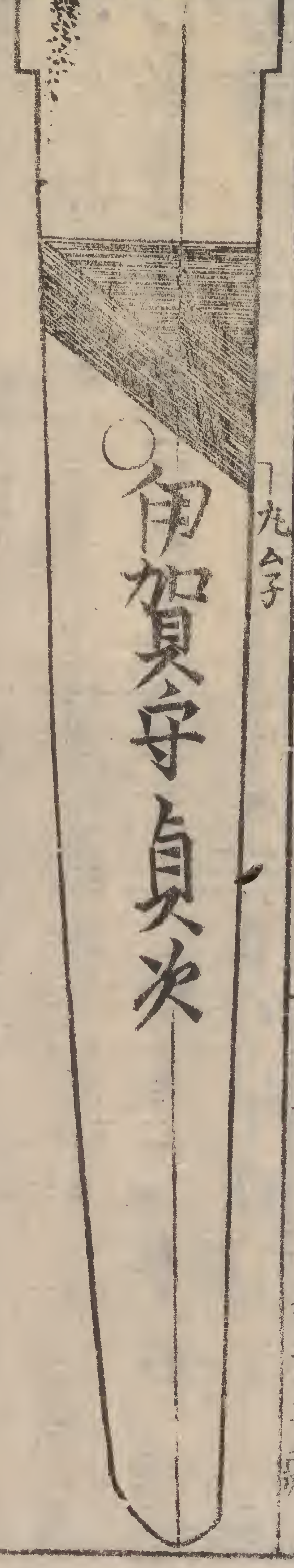


井上真改ハ子也後集に國貞嗣つと記也是は作父ヨリ劣ぬとも
上工也地の鉄細に小錵白ひ出大乱文多し父の作のごとく強からず

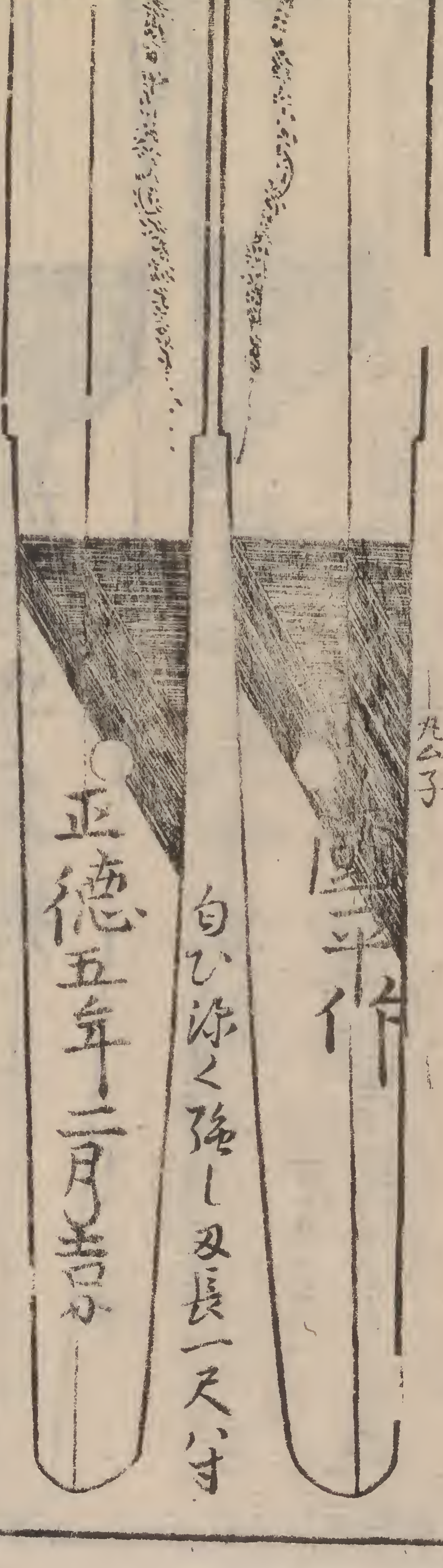




貞則ハ井上真改か門人にて佐吉用つと号す此作地鉄細かに麗しく荒錵小錵多し匂ひ至て深く刃強く勇て真改の如き物有延宝天和貞享の比造りしが賞美する者ハ摂州住貞則と切後奥州白河に下りての作をみ出よりてハ出来物稀也中心の仕立真改を写し鑢ハ助広を学ぶ中心の刃方を丸くせしハ極めて出来物也子孫白河に相続すといへ共平ハ此一つあるべし中心ハ貞則ニ似て作一ッ錵ハおこつれ置

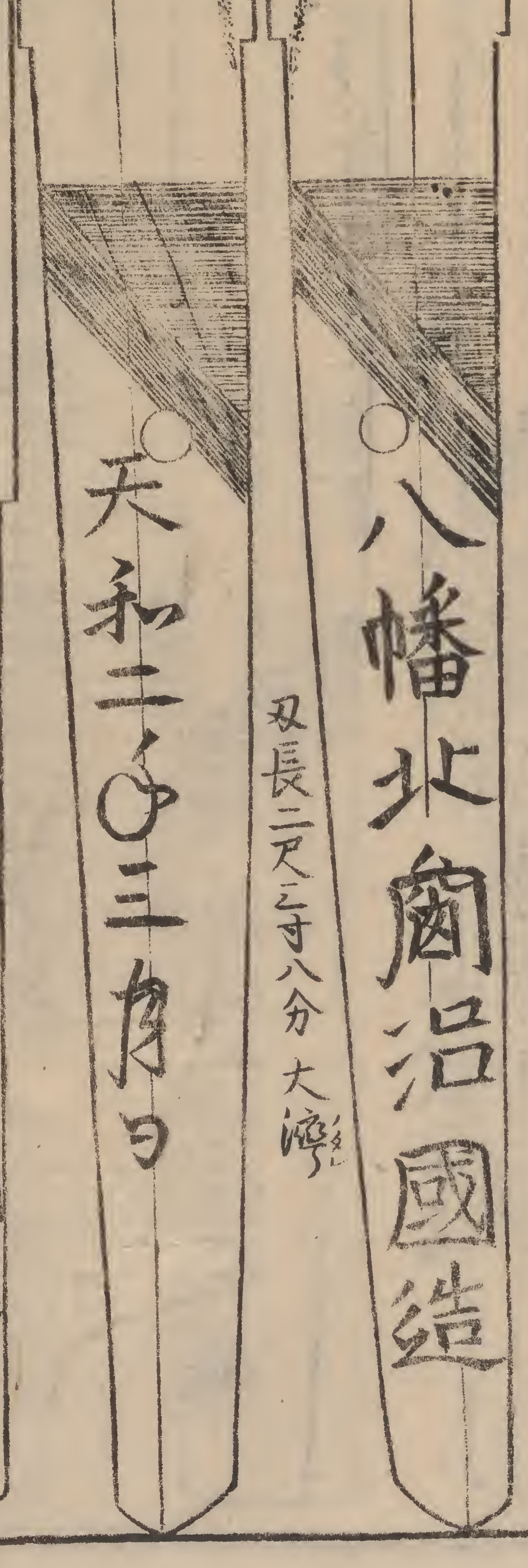


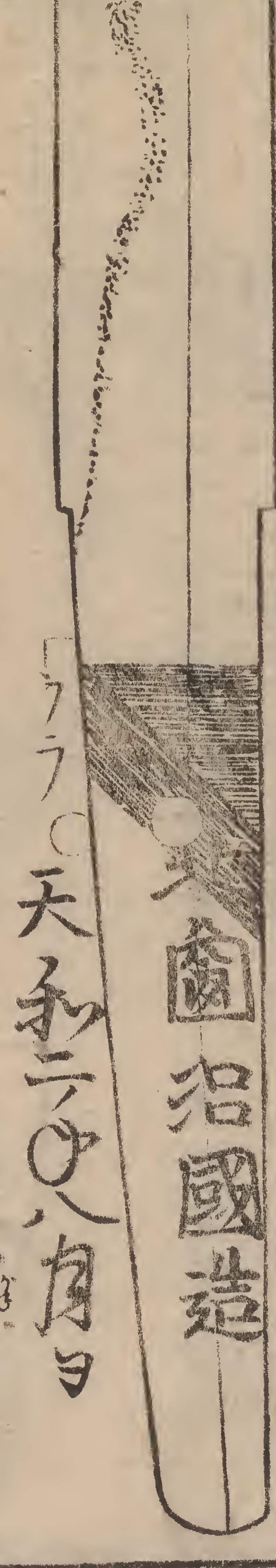
貞次ハ貞則が弟鈴木甚右衛門と云地鉄細ゞ小まき業ハ銘白ひ添し
貞則ニおとらざる物ニ見ても上段がつくや



國平ハ井上真改がつく人也地鉄細に小沸多く白ひ添し國平造ニ

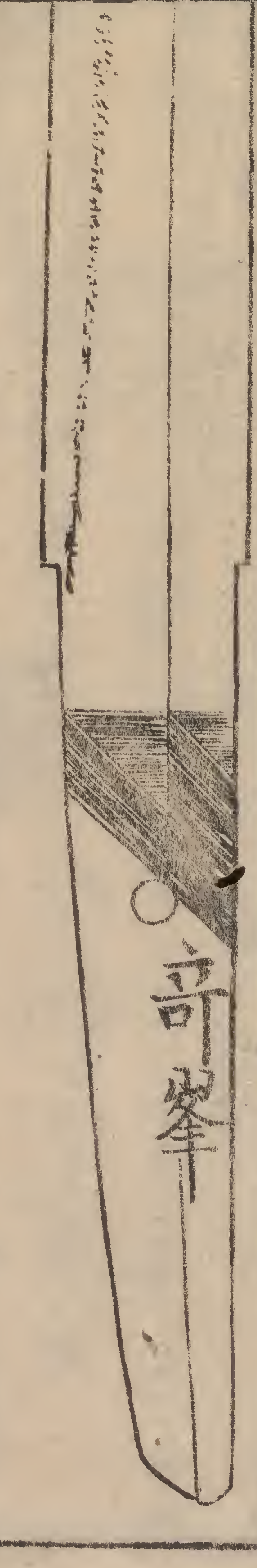
其銘也保上段ニ似たる物有中ニ仕立き段を写し極大分違也

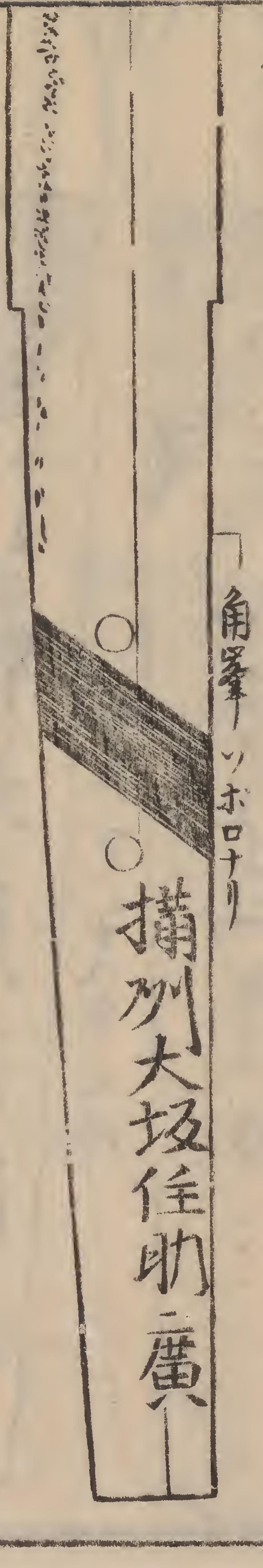


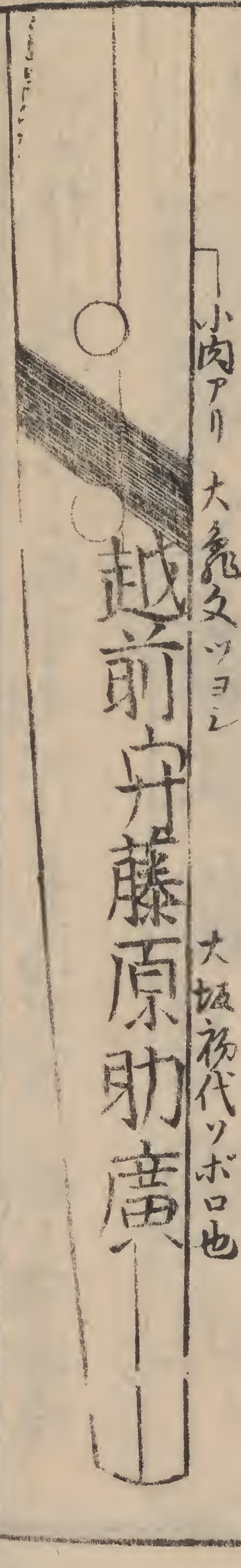


治國も上段が弟子ニ里機右衛門と云ニて上手也銘の鑚ハ手あるも
比屋似たものありし又世傳当多し能く吟味すべし

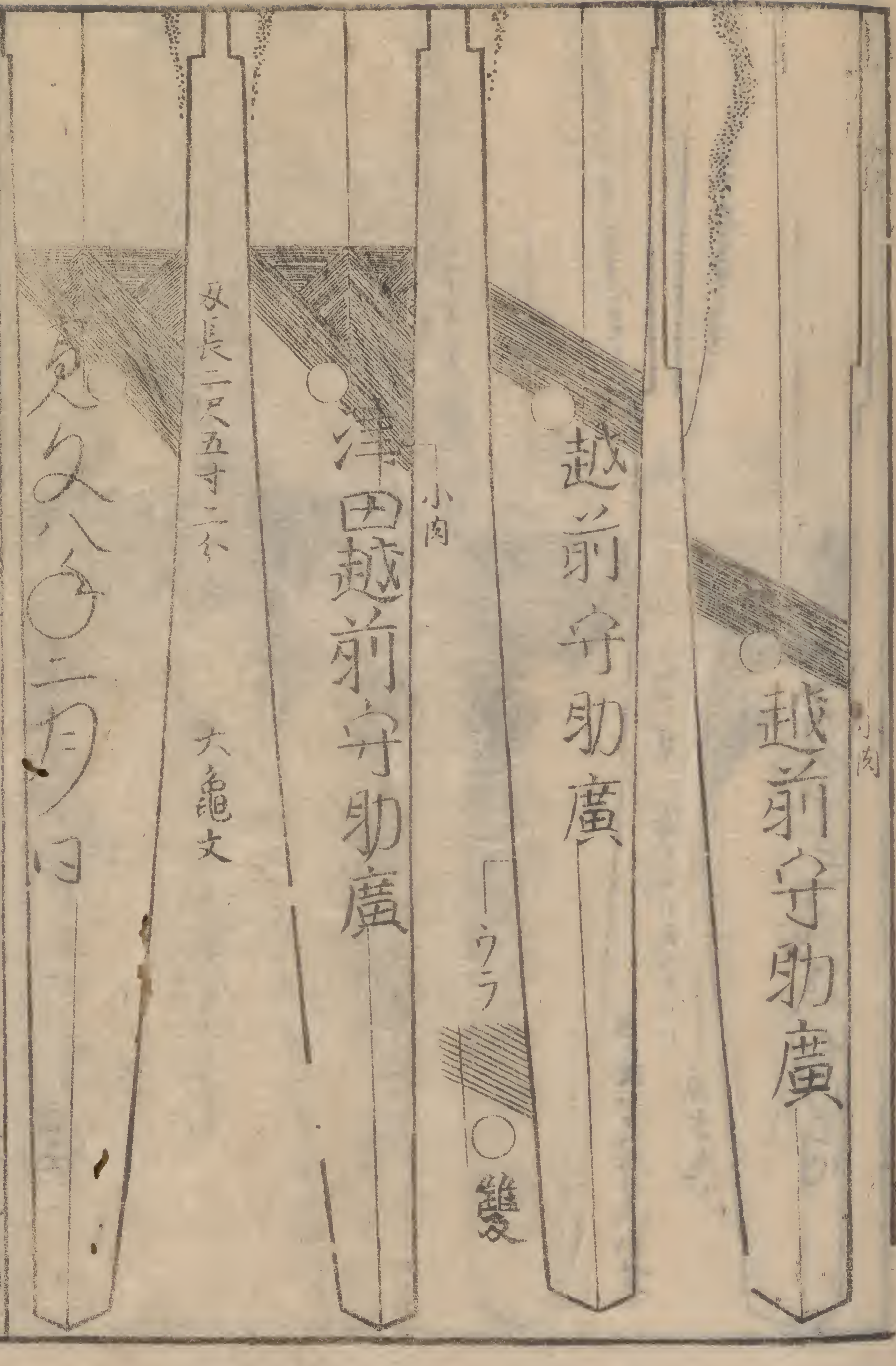
奇峯ハ勝久が評に井上真改が隠名なるべしと云。是もあるに似り
然れども予が観る所の物ハ一も出来賞す處なし。備後の識者と
侍



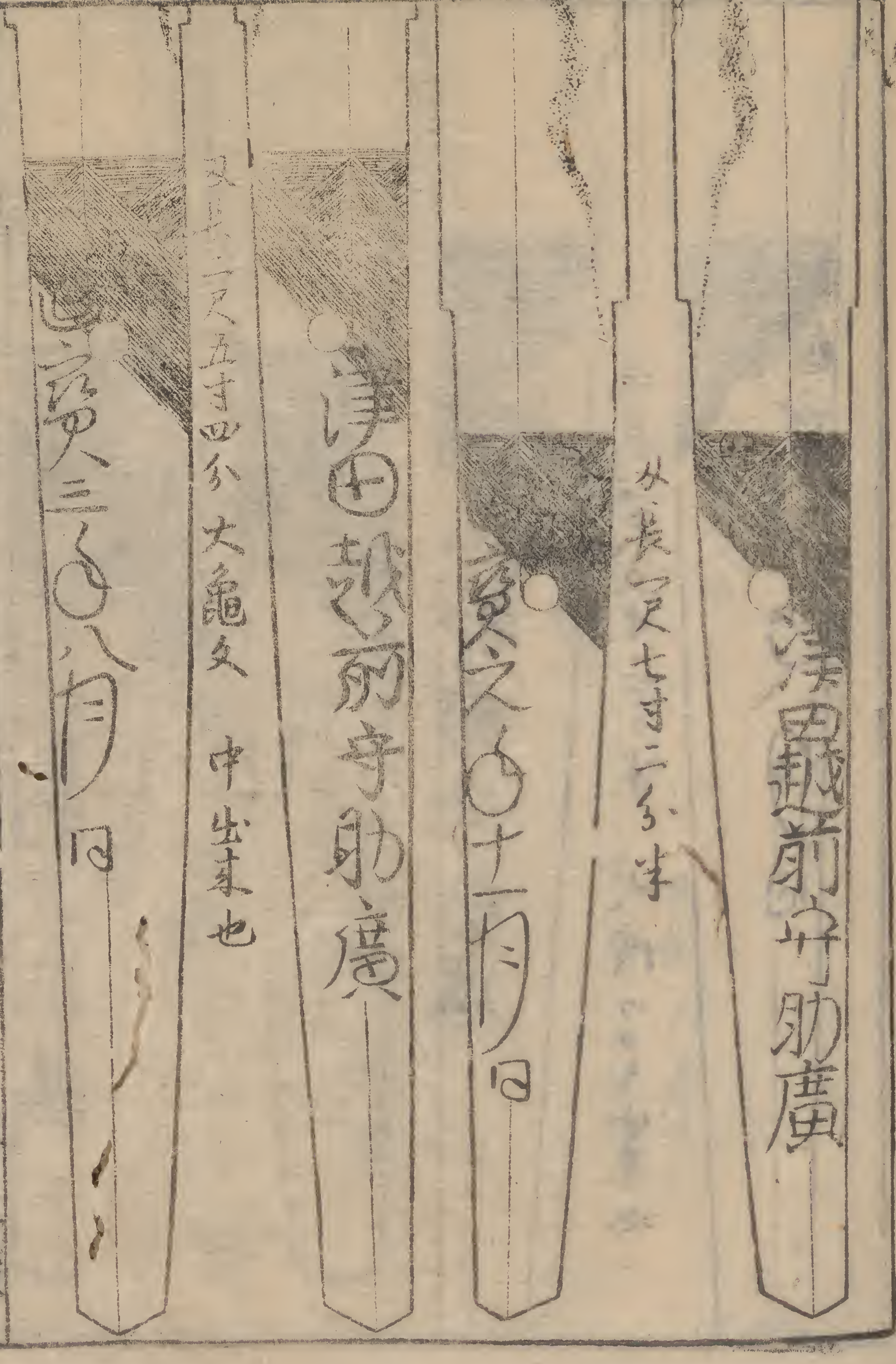




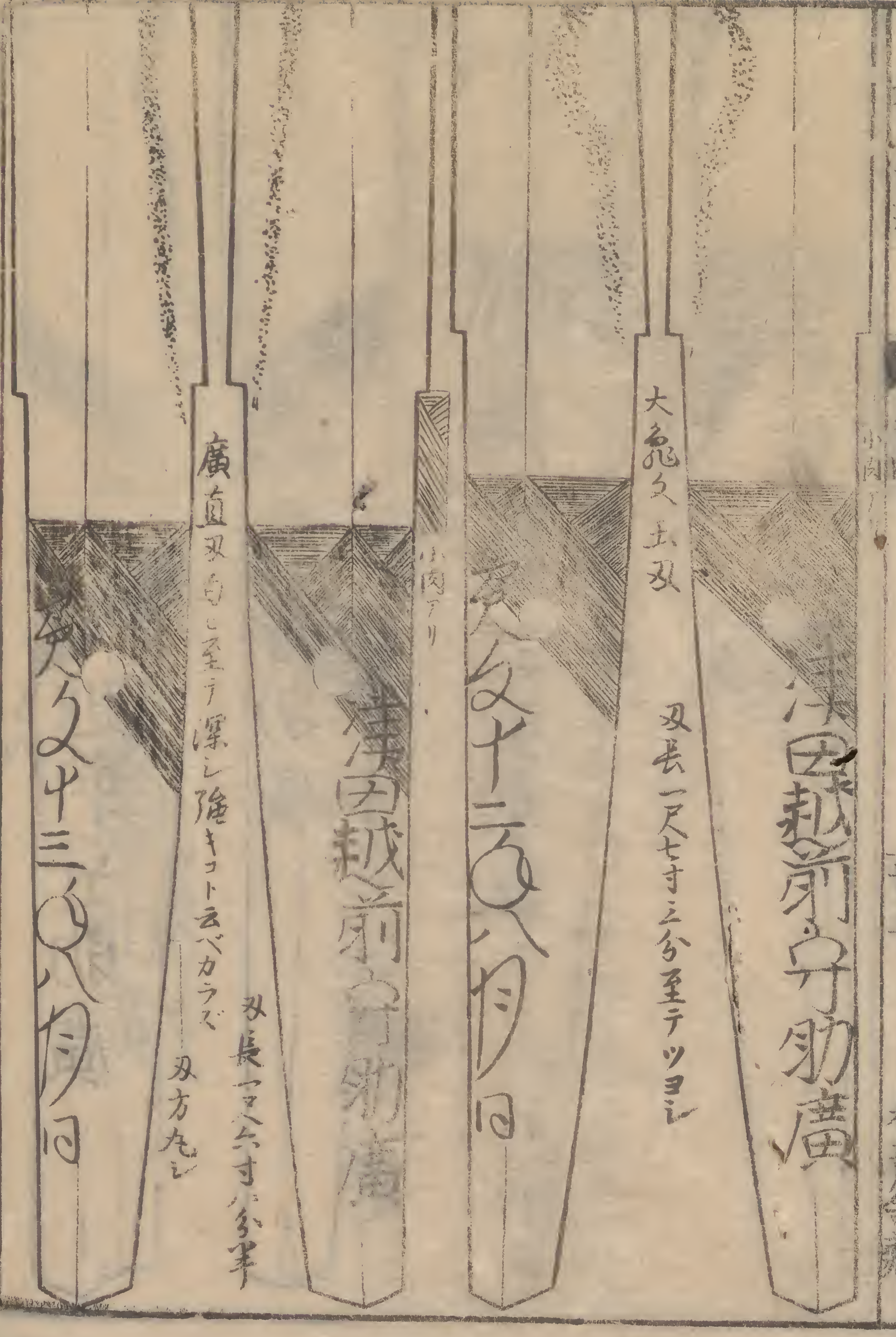
林……蔵

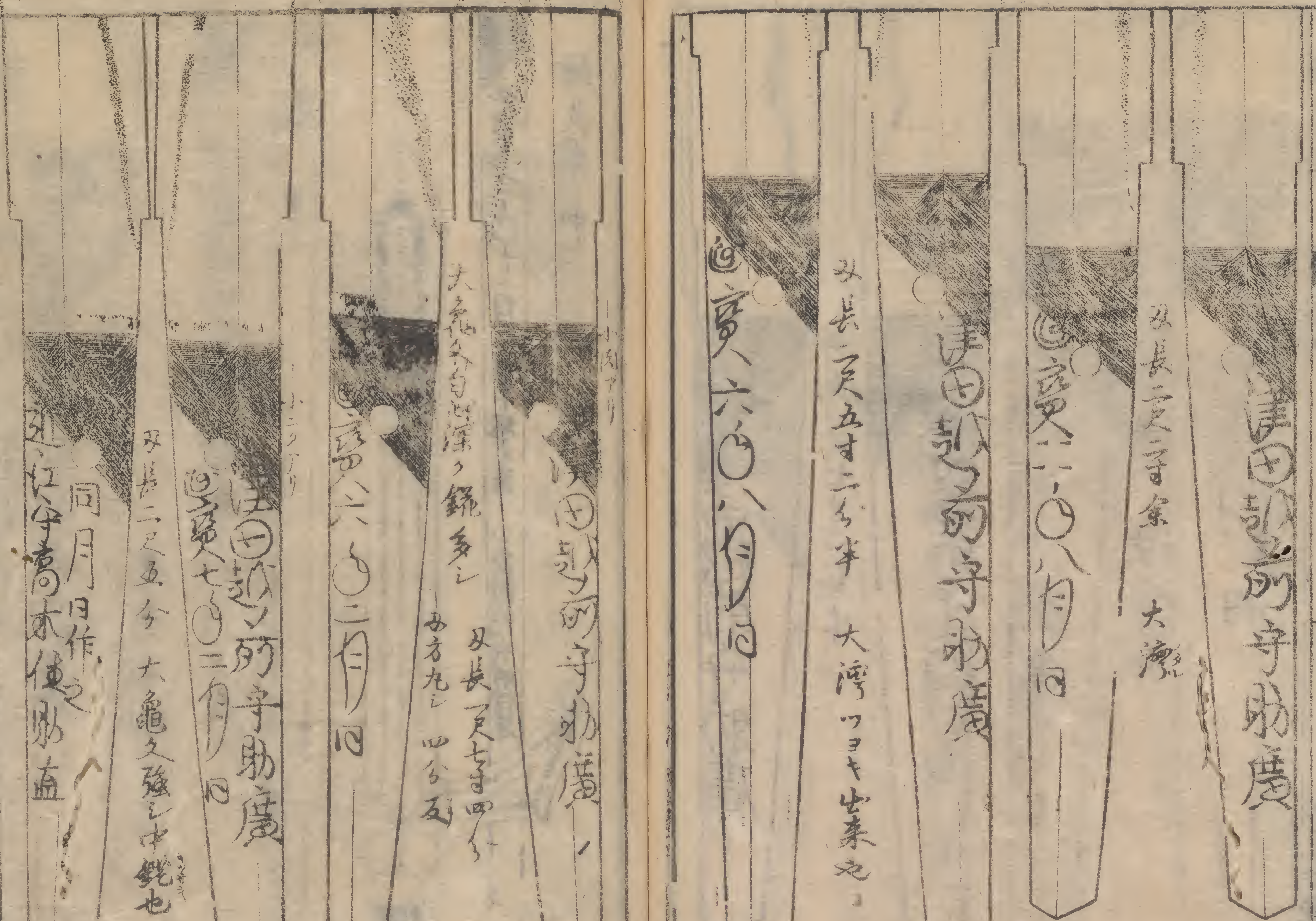


林……蔵

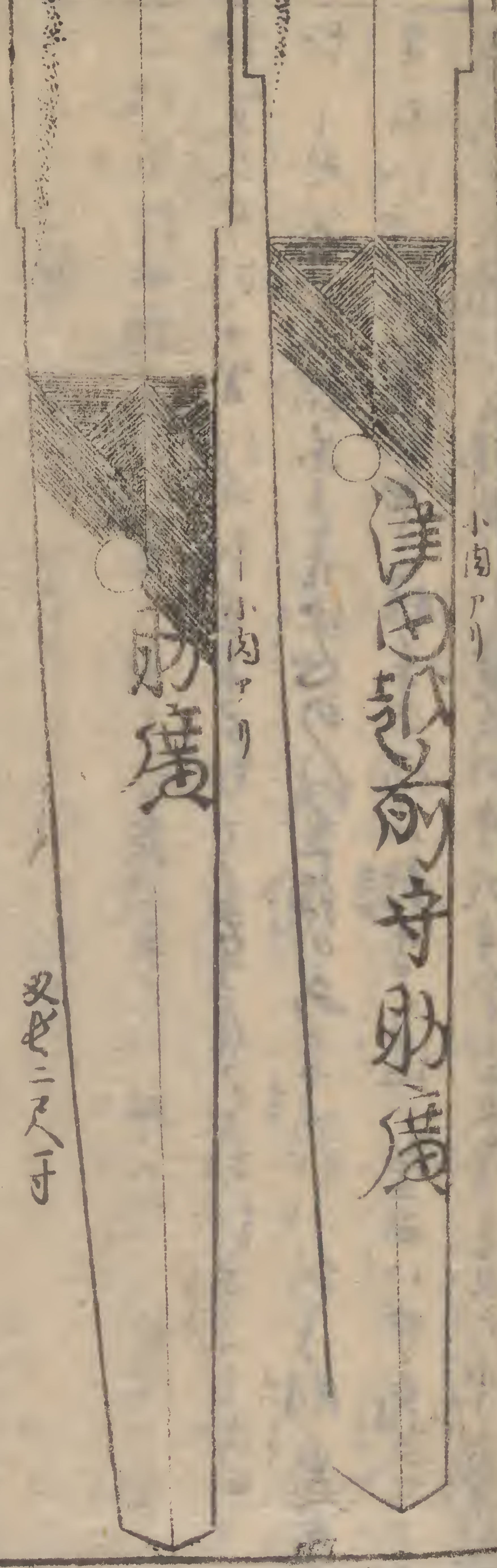

津田越前守助廣
刃長一尺七寸二分半
寛文年十二月日
津田越前守助廣
刃長二尺五寸四分 大亀文 中出来也
寛文三年八月日

水精舎蔵


小肉アリ
津田越前守助廣
大亀文 玉刃
刃長一尺七寸三分至テツヨシ
寛文十二年八月日
小肉アリ
津田越前守助廣
廣直刃匂ヒ至テ深シ強キコト云ベカラズ
刃長一尺六寸八分半
刃方九シ
寛文十三年八月日


津田越前守助廣
寛文十〇八月日
刃長二尺二寸余
大濟
津田越前守助廣
刃長二尺五寸二分半
大濟ワヨキ出来之
寛文六〇八月日
津田越前守助廣
小肉アリ
大亀文白ニ深ク錵多シ
刃長一尺七寸四分
元方九分 四分五厘
寛文六〇二月日
小ニエアリ
津田越前守助廣
寛文七〇二月日
刃長二尺五分
大亀文強シ中錵也
近江守高木住助直
同年月日作之

水青舎蔵



助廣ハ攝州大坂の住人生國ハ播磨也津田助廣ハ父ニて攝州住藤原又越前守とも切る二代目も若年の比ハ越前守助廣と斗り切る父子同銘也といへども銘の刻様ニて鑑定すべし此作地鉄細ニ錵匂ひ有初ハ小乱文丁子乱文多し後ハ廣直大濤荒錵ありて見事なる者多し世人此作を助廣と稱す故お津田の数打まで大坂へ来て初代圖也ニ一つ人も為て出堂を勵み津田の系統押すて其子孫し丞御内

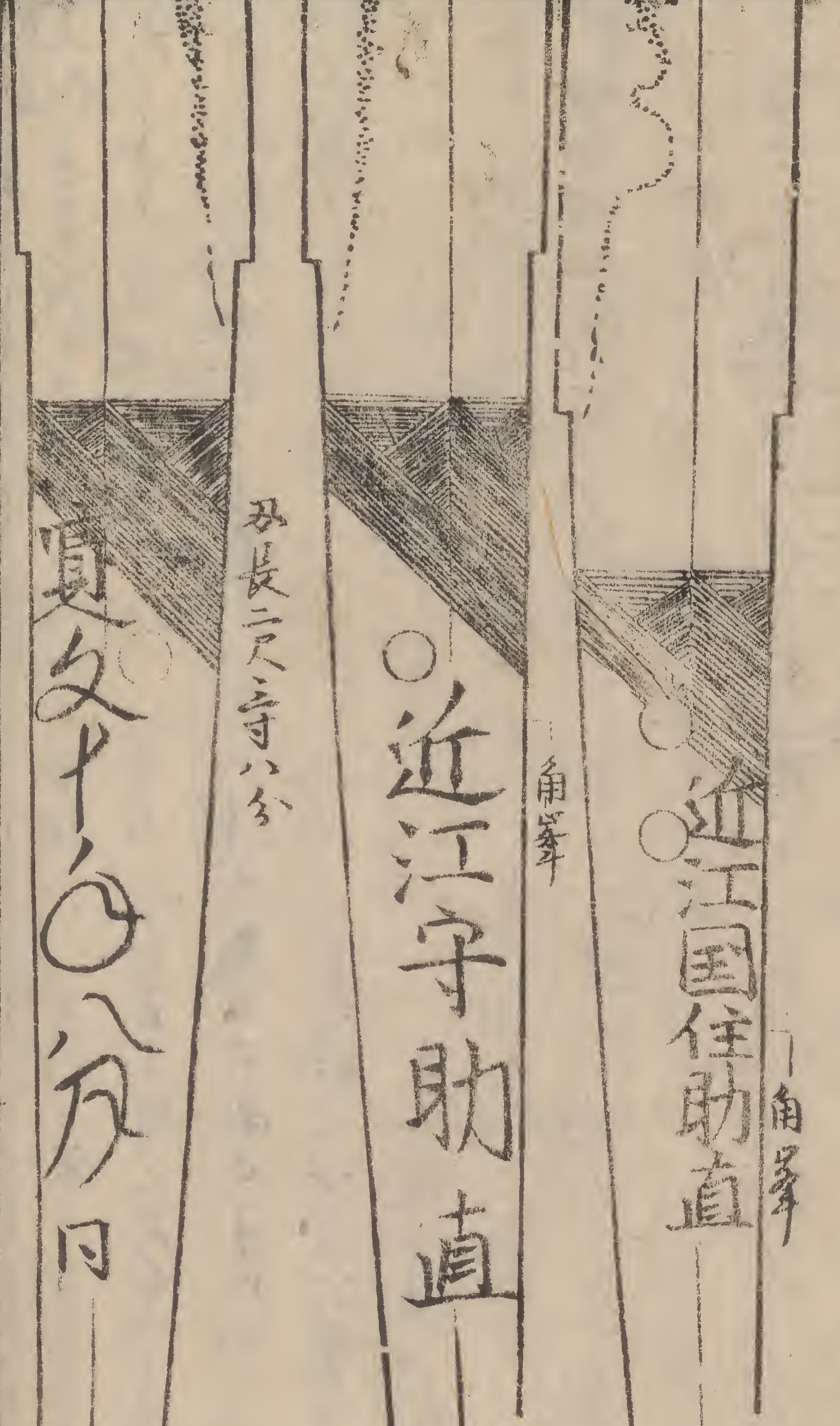
の名人津田越前守と切て二世名世にあるし中心の方図刻字の字雙
の一字を切しを初代にばかり作と世に業して称す故に此事あるへし雙の
字切たる作数十を見るに二代目若年の銘に疑ひなしと伝へたと唱
しハ二子ある妻子ある常に處服するをもて諸人誰かれとなく謂しより
のちに開く伝れ代津田の称を呼しも是執照廣いんと此ならの意を
含む雙の字を切たるや二代まては津田と切氣格高々津田を切
ざるまけ雙の字なとものますして切しなるへ

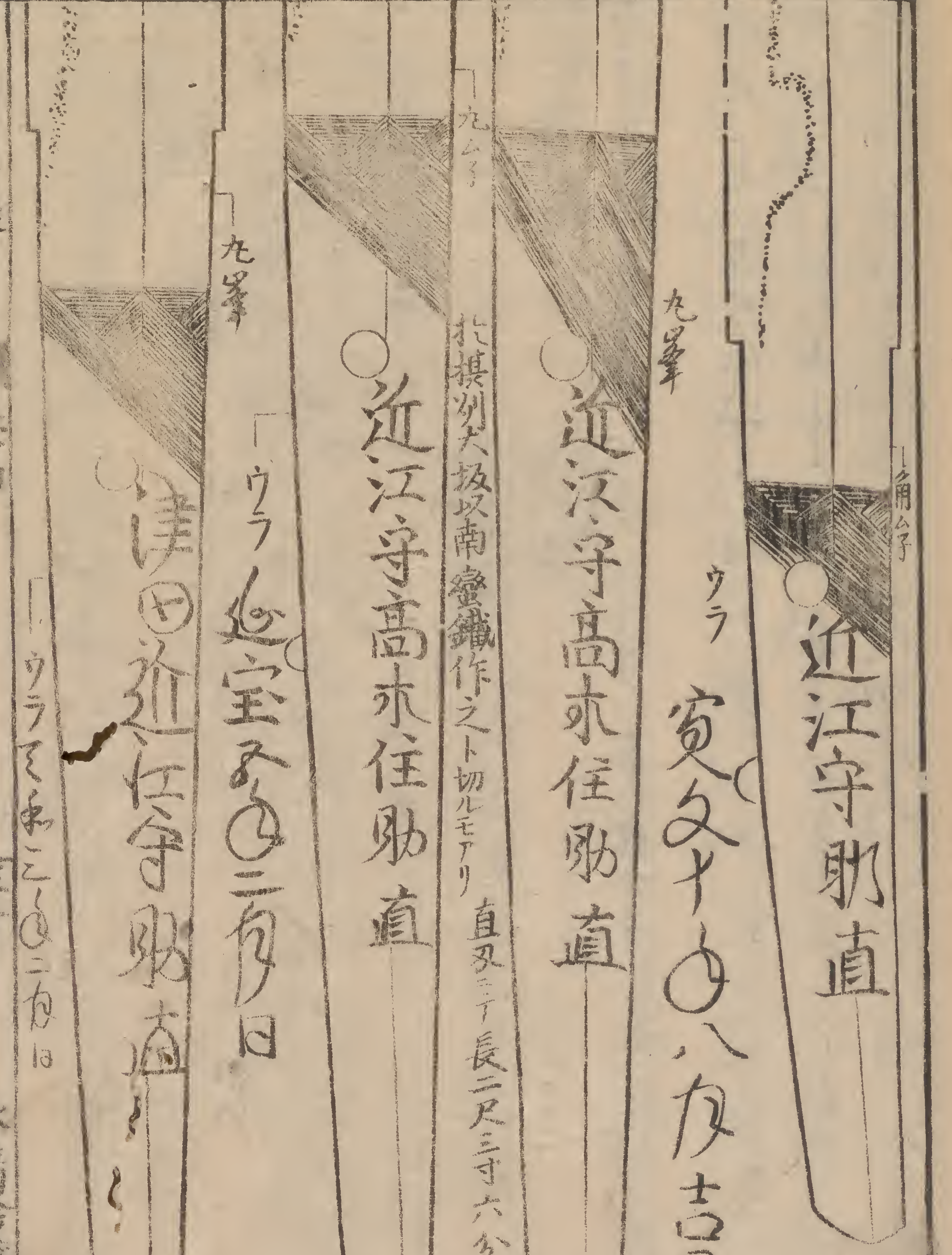
二代目津田越前守ハ若ハ近江守と云萬治寛文の頃までハ越前守と斗
切寛文中比より津田越前守と切て菊の月日も切添事とぞかり
切し是なる子目銘あるも作中心の位置様の気高きかれ公子明白之年
異なるも津田も角ひやうと雅きの作ハ緒まで造い堂々ハ中乱文丁子
乱文也此銘後く銘あらし寛文の中比より寛文真文大濤瀾乱

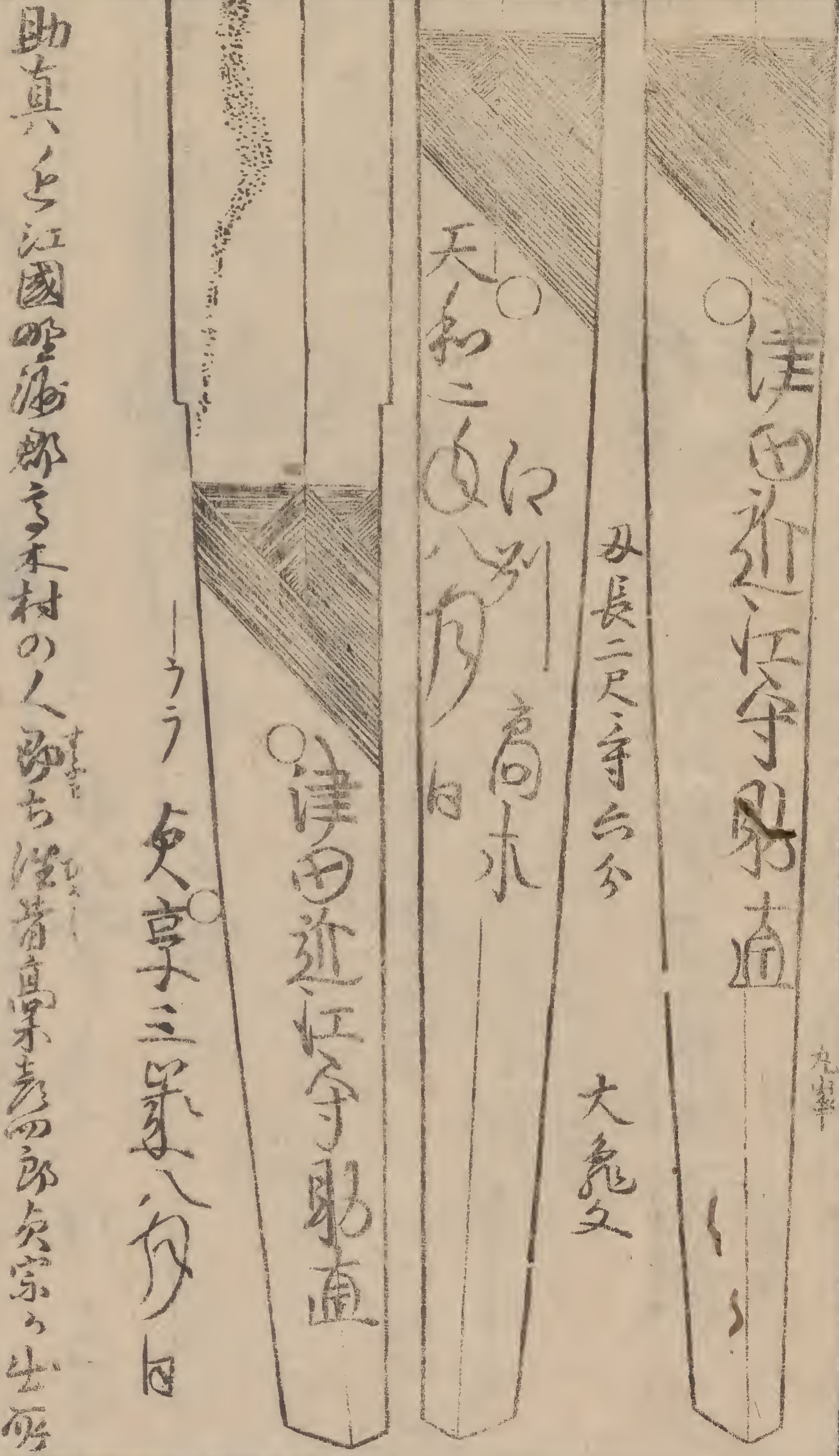
又何れとも花やかを飾て模様の下地は一旦濤にて取て直刃丁子乱文
大ぐしまに濤瀾みだれ数々にとりやしを直し理く見せざるか大坂
新刀の秘所也其子丁子乱文ハ直刃濤大乱文のぬくすけねしれ濤湧
濤大乱文古く乱のぬきハ叢銘小銘深く白い深くてしや見る背ハ此處ま
ものあいとすも乱文地鐵細に強かりしれ気きハ見えかに鐵の極のるを浮造
其方ハ丸鍔ひたる撲堂居造り甲伏せる之鍔伸て帽子丸く少し出る心
有横手筋の所まて八寸幅なし狭し是帽子に位をつくるる為之帽子
の方ハ銘細く白まて色もなかく如しは小艶いふ程うつれ中心平のふし
て鑢ひくし鑢へちらく と目釘立て見るの地摺出しの見所あるに二
所右銘ハ近藤流まして鏃溝あり鐵ひ刃形薄くてさして若き著ずる
本紀事實に絶世の名人といふべし是を以て初代に勝る鍛冶も
し鍛ま古の正真のまま有銘の物不有重代の銘あり鑢もてつ見る兮く在し

無銘ハ別て鑑定事

或曰廣つ子弘之作ると云求め見物見す是非明白ならず

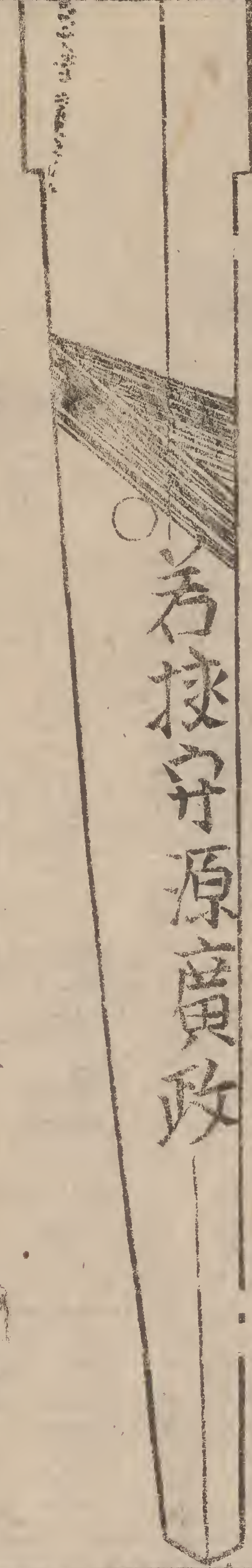




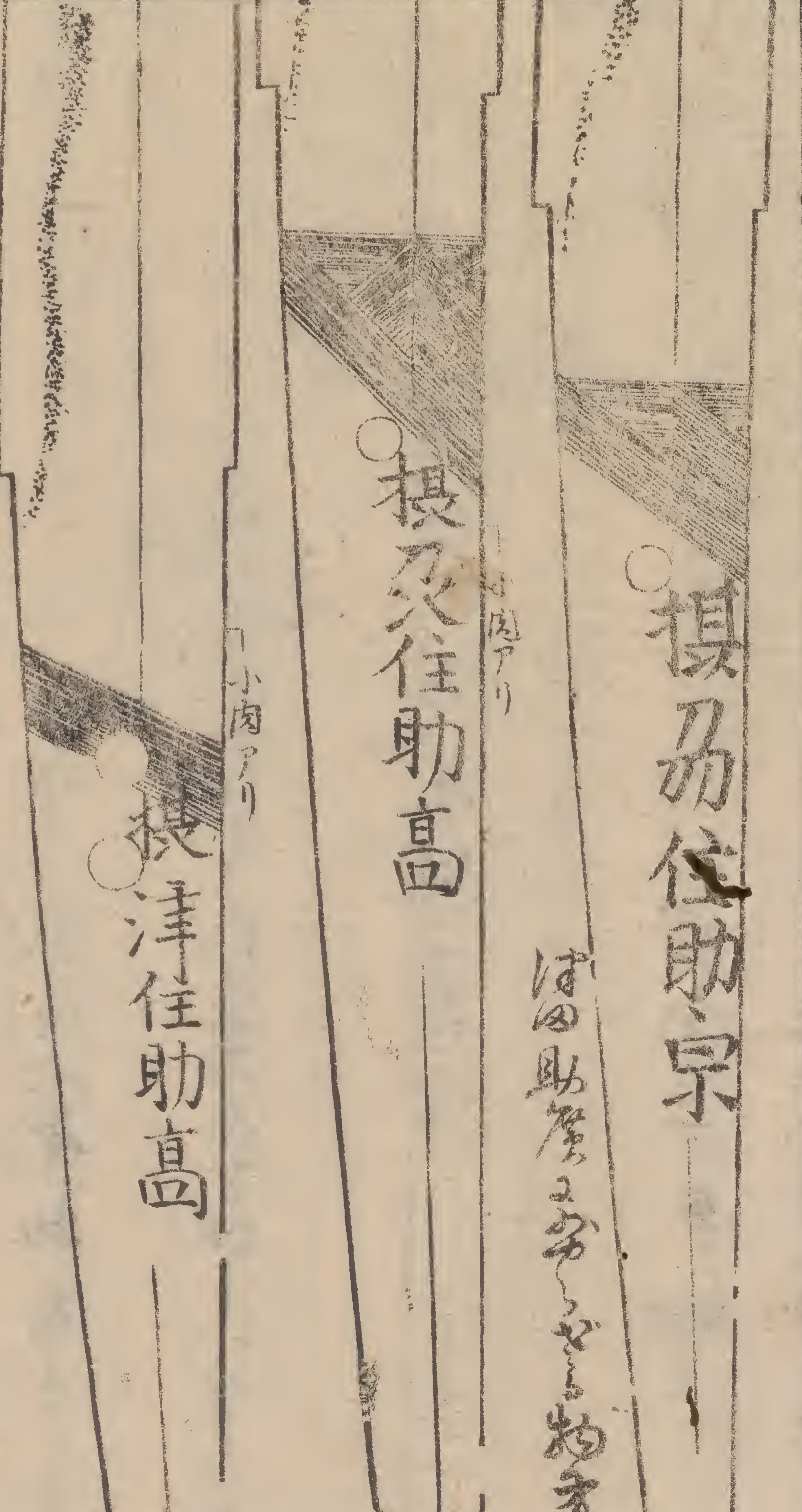


助直ハ近江國野洲郡高木村の人也跡ち淡者高木彦四郎貞宗ニ出所
也初ハ近江國住助直と切後ハ近江守助直と切寛文の年号を切又
延宝氏ハ近江守高木住と切初代助廣ニハ入来しが後ハ聟となり

津田近江守助直と切年号の書ハ江州ニ来と切候ふ者も有刃ニ劣
ざる物也此作地鉄にて細く鑢小錵多く白沸し津田助廣ニ劣ら
ざる名人世の知る所也直刃大濤乱文一躰あり代ニて利也刃
の仕立助廣が如くにて鑢子助廣より筋違也箒初ハ角ニて三来
住と切し比より丸箒ニ也
一書ニ近江守藤原の助直と記せり助直藤原を切しハ一つもなき也
ずほ鍛石(?)



廣政ハ津田助廣ガ門人也出来甲乙有宜き物ハ助廣ニ不劣鍛錵也



助高ハ助宗が弟兄弟共ニ津田助廣ト一ツ人也廣政助宗モ一人也ハ
助高が作物ハ至極出来たるハ助廣ニ劣らざる物有

新刀辨疑巻之四終